新型コロナウイルス感染症の県内発生について その14

～これまでの補足と後遺症～

和歌山県福祉保健部技監　野尻　孝子

2021年１１月25日

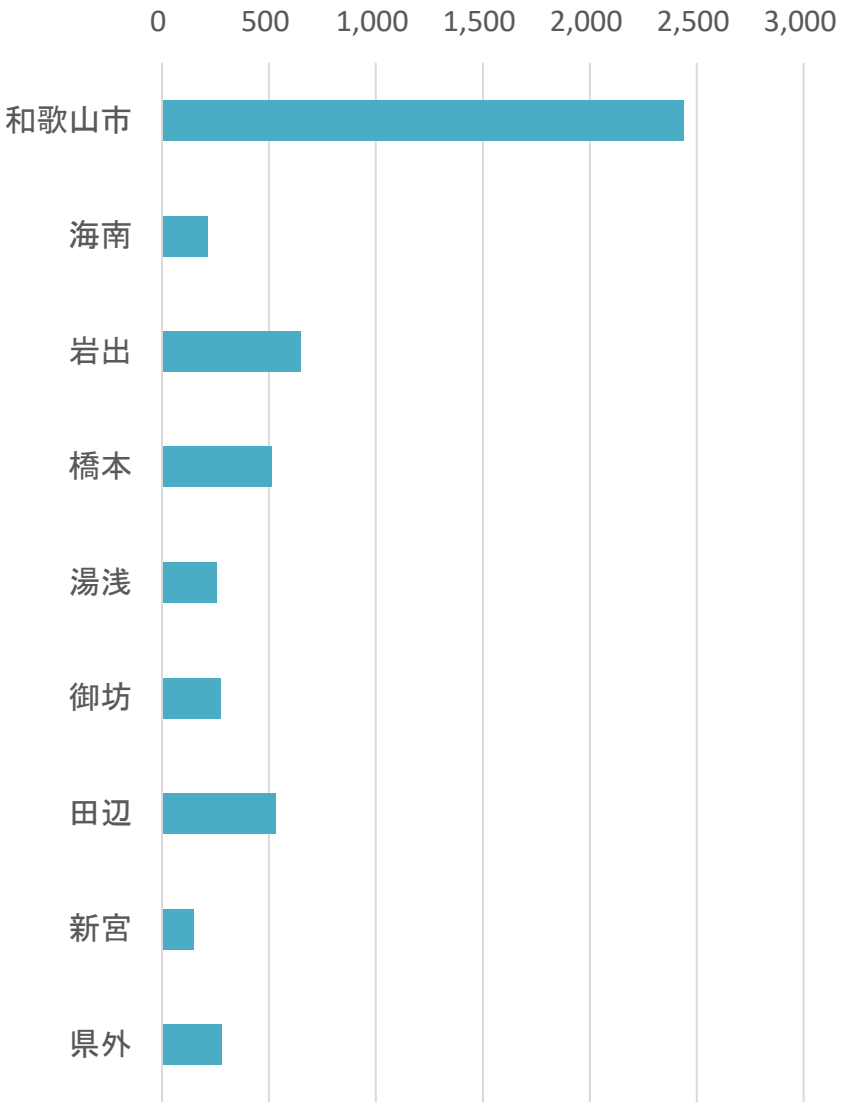
和歌山県
Wakayama Prefecture

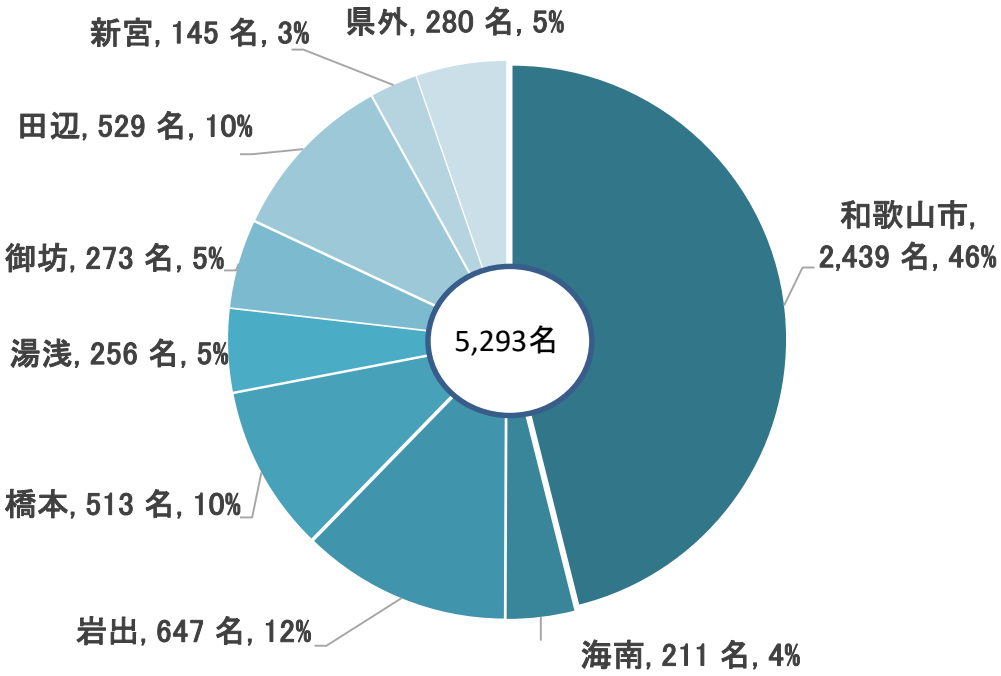
その１．補足

第一波～第五波の住所地保健所別陽性者数

（令和3年10月31日発表分まで）

※県内カウント分

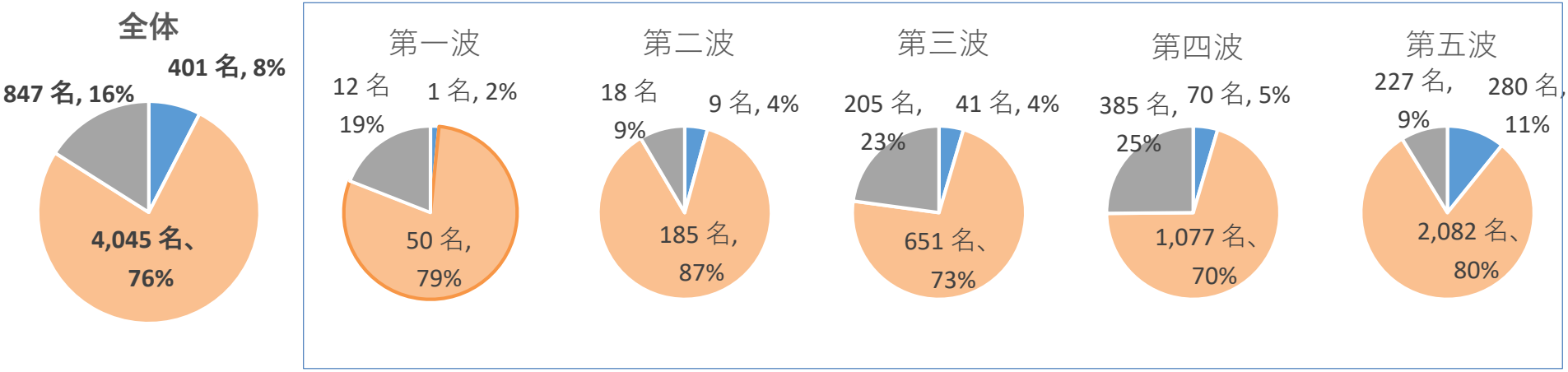


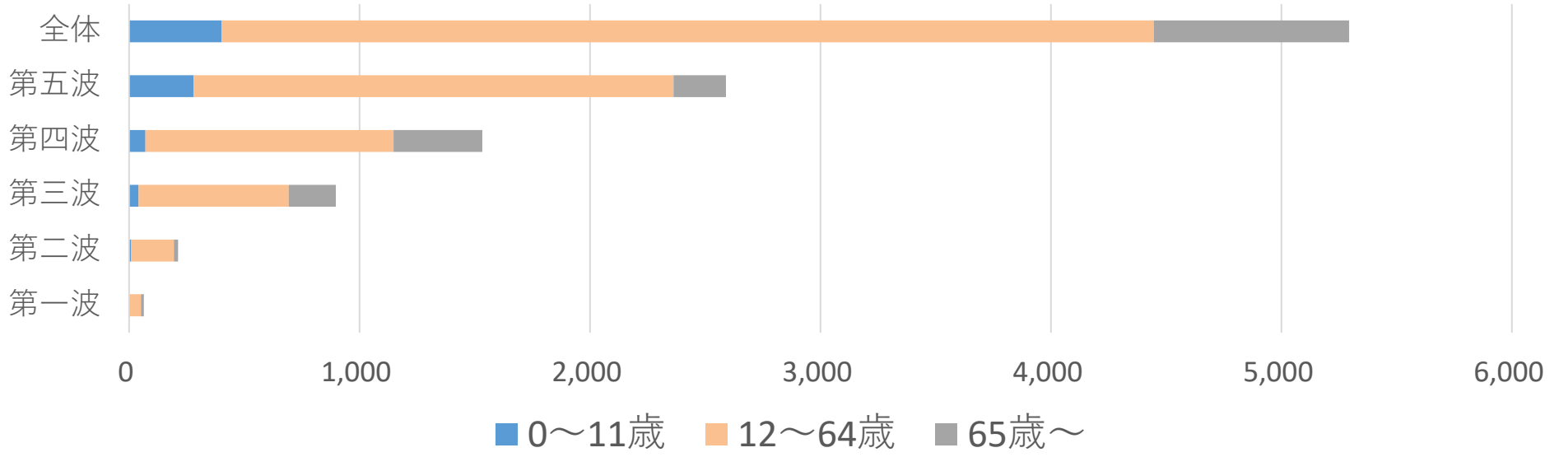


第一波～第五波の陽性者の年齢構成

（令和3年10月31日発表分まで）

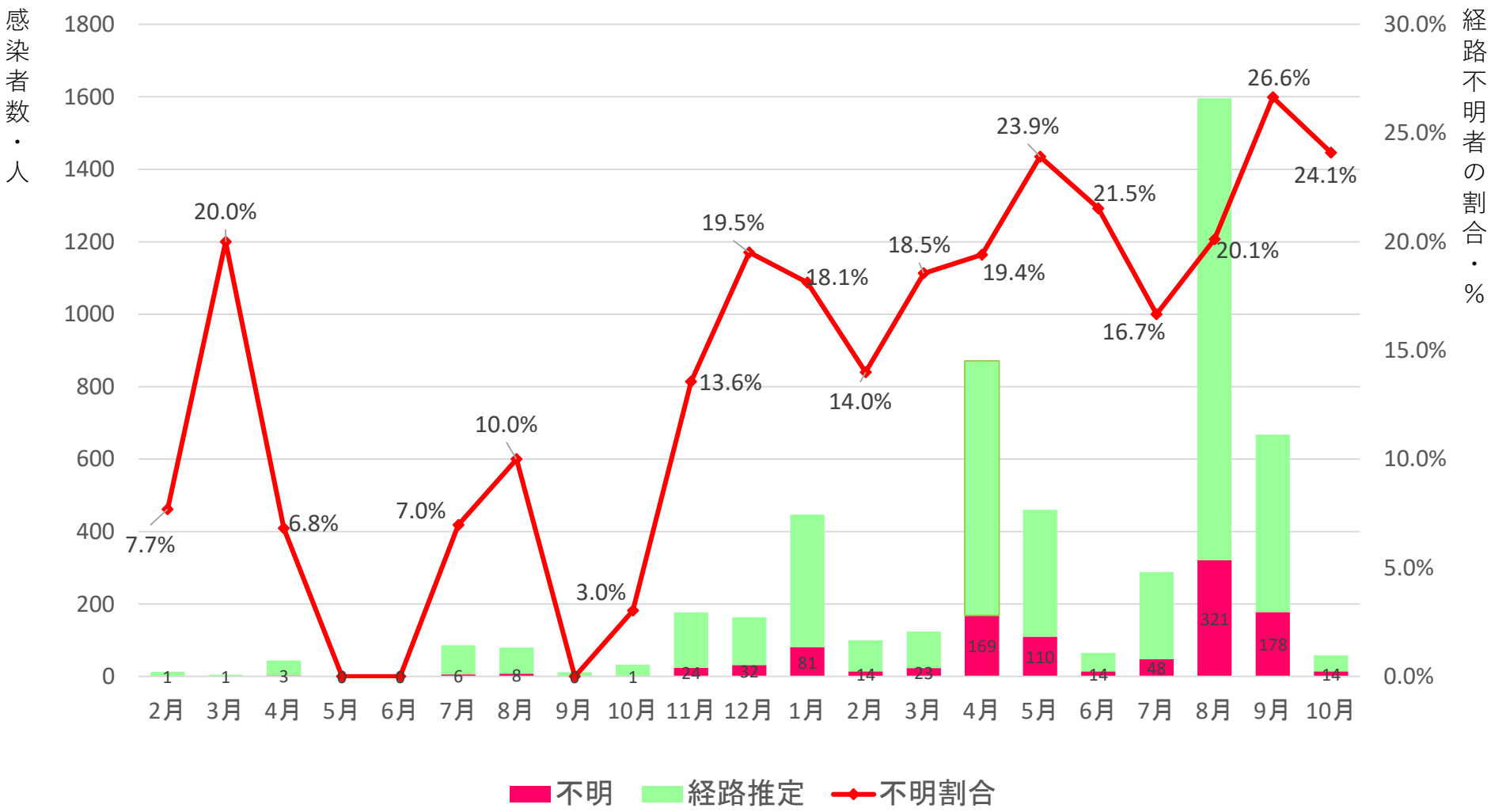
※県内カウント分





月別の感染経路不明の割合（発表日10/31まで）

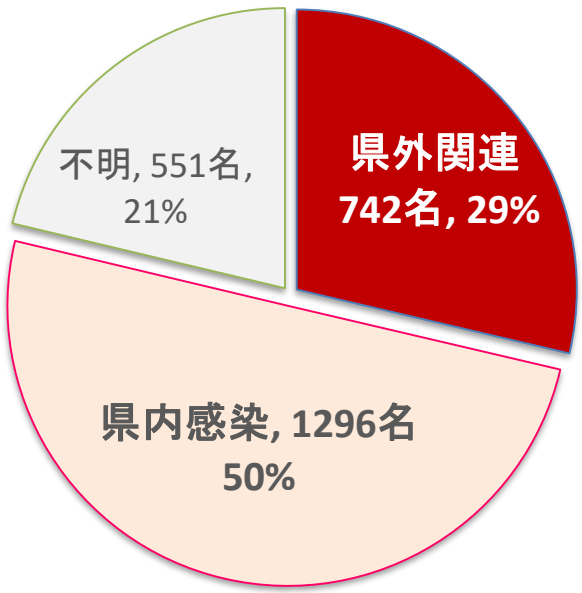
○ 感染経路が不明の者の月別の割合を見てみると、次第に不明者の割合は高くなる傾向にある。ただし、感染者が急増した第四波や第五波においても30%を超えていない。



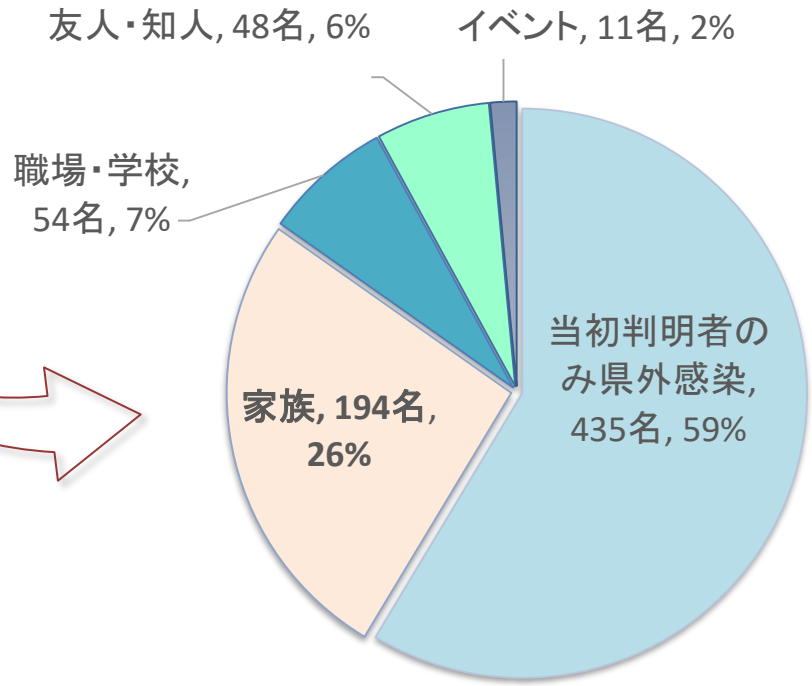
第五波・県内感染者の感染経路推定（令和３年7/11～10/31）

令和3年7月11日～10月31日発表分　**2，589件**（県外計上者を除く。）

推定感染経路（県外・県内）

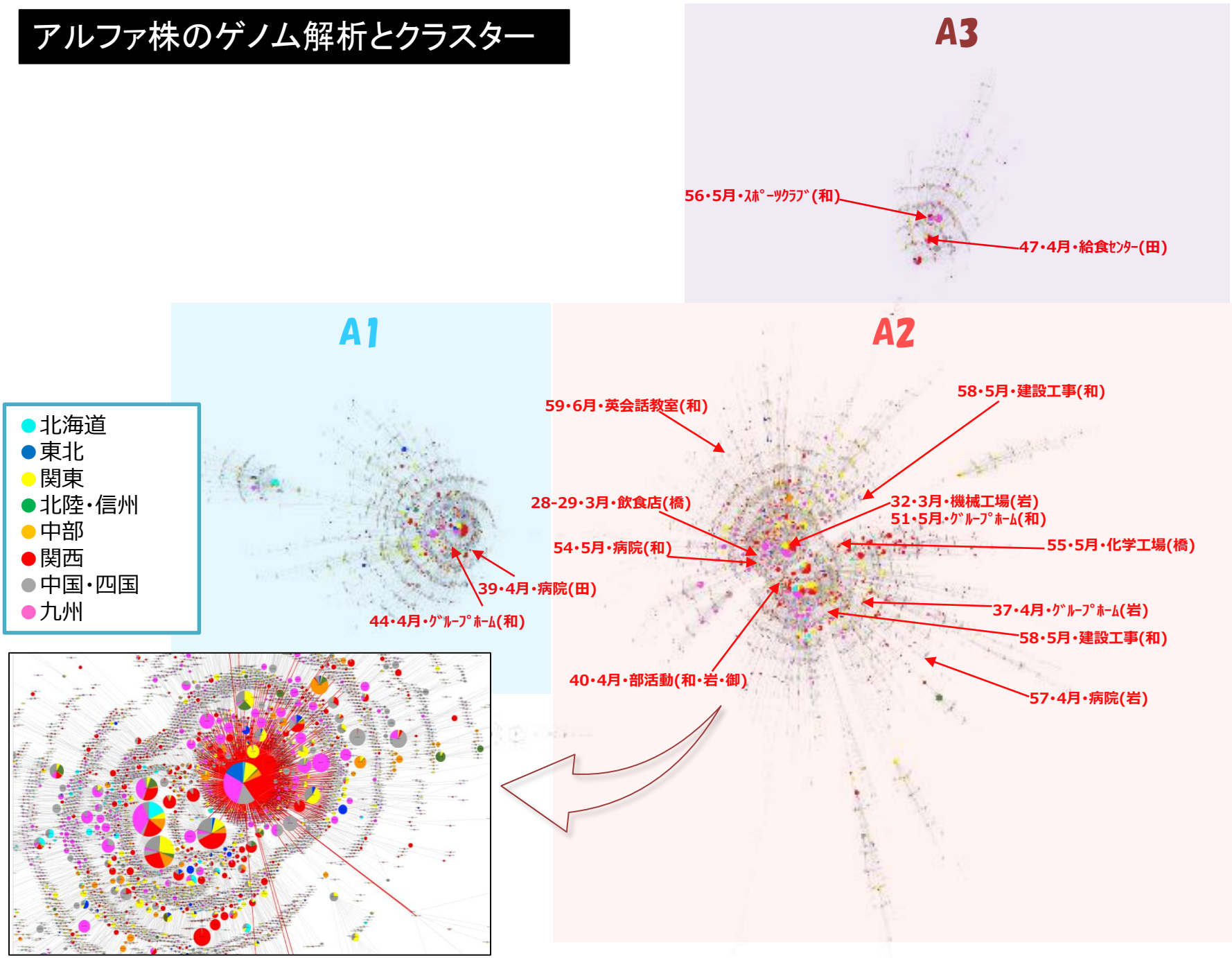


県外に関連した感染の内訳



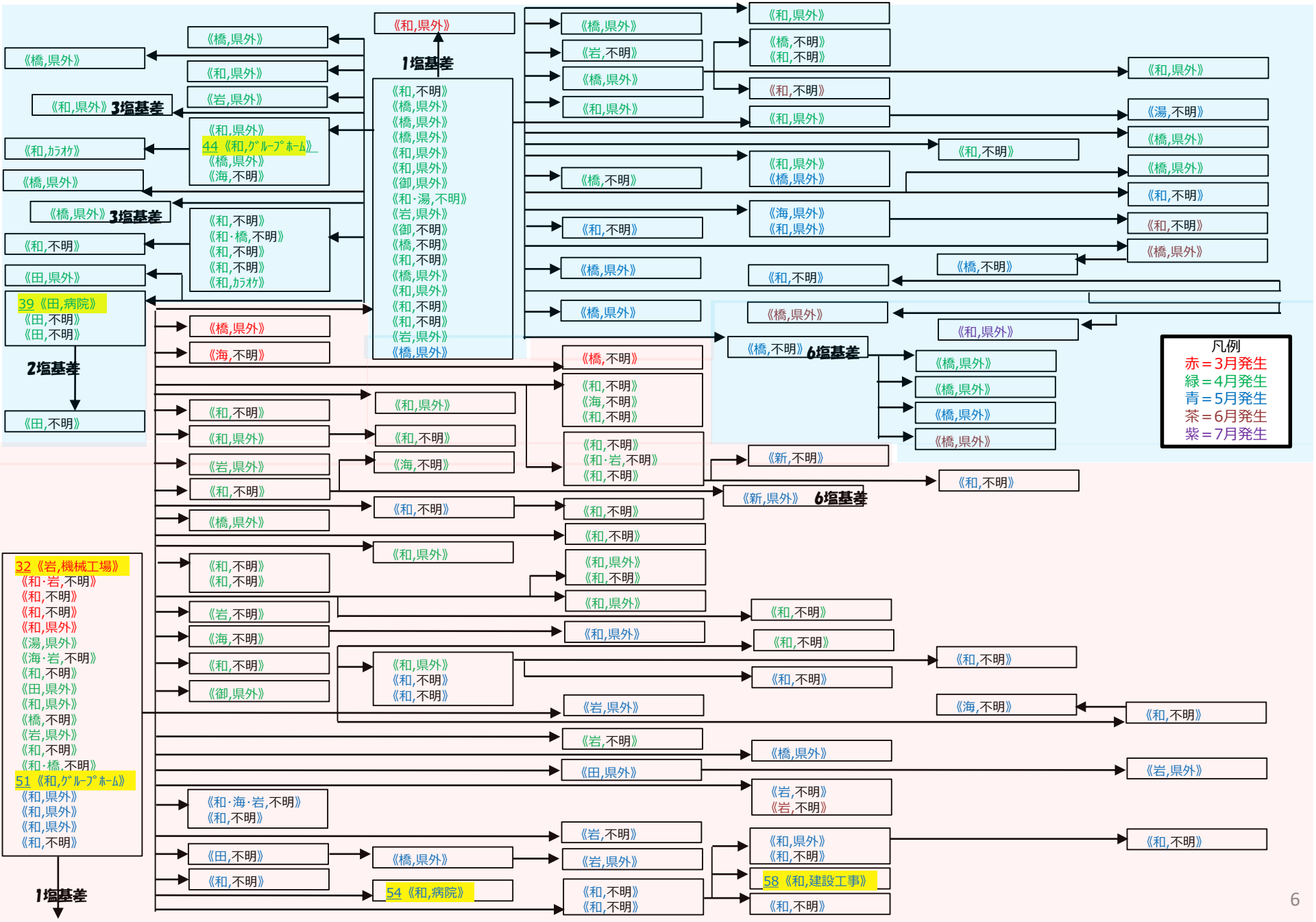
ゲノム解析

アルファ株のゲノム解析とクラスター



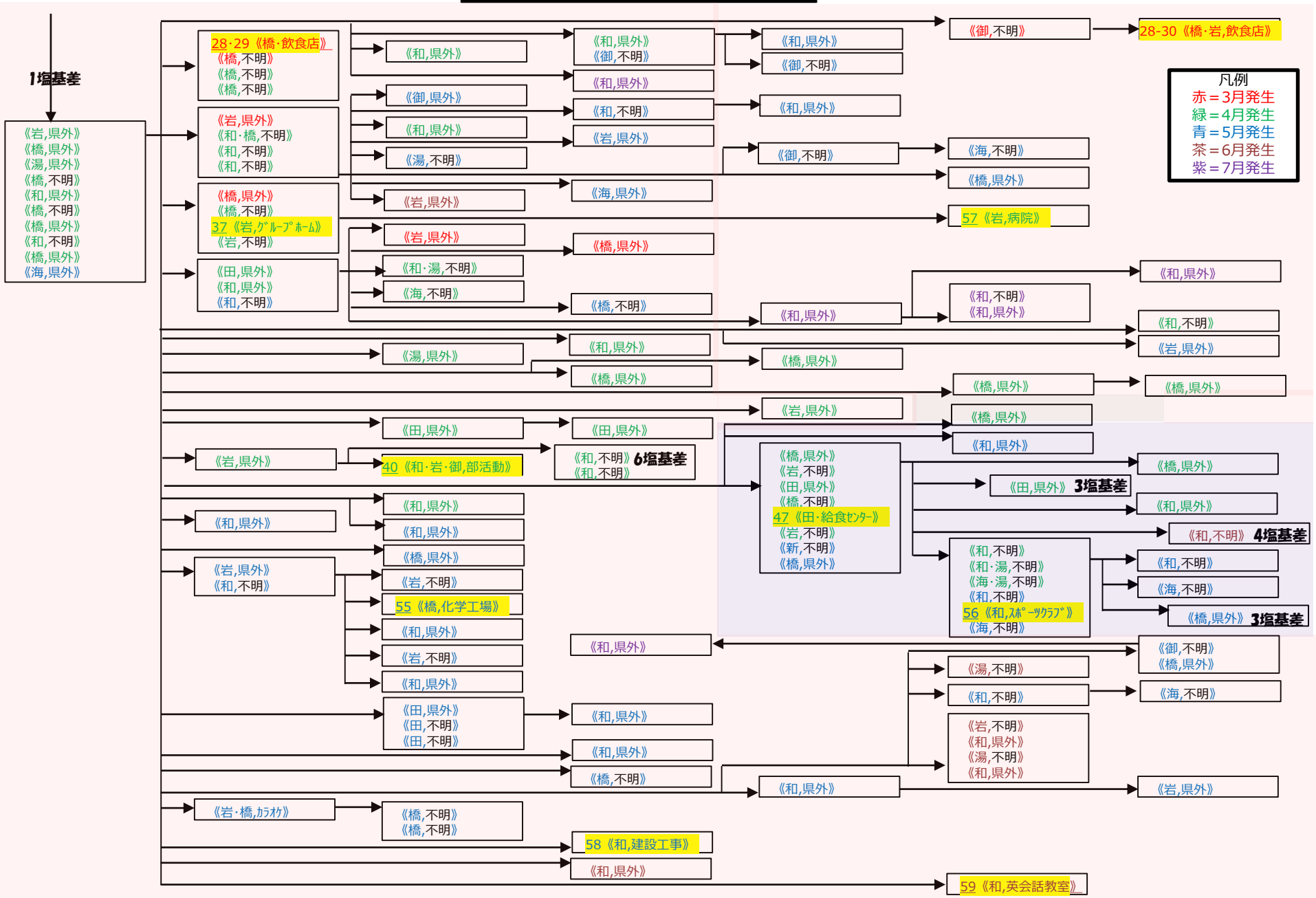
アルファ株の伝播事例

※クラスターを示す

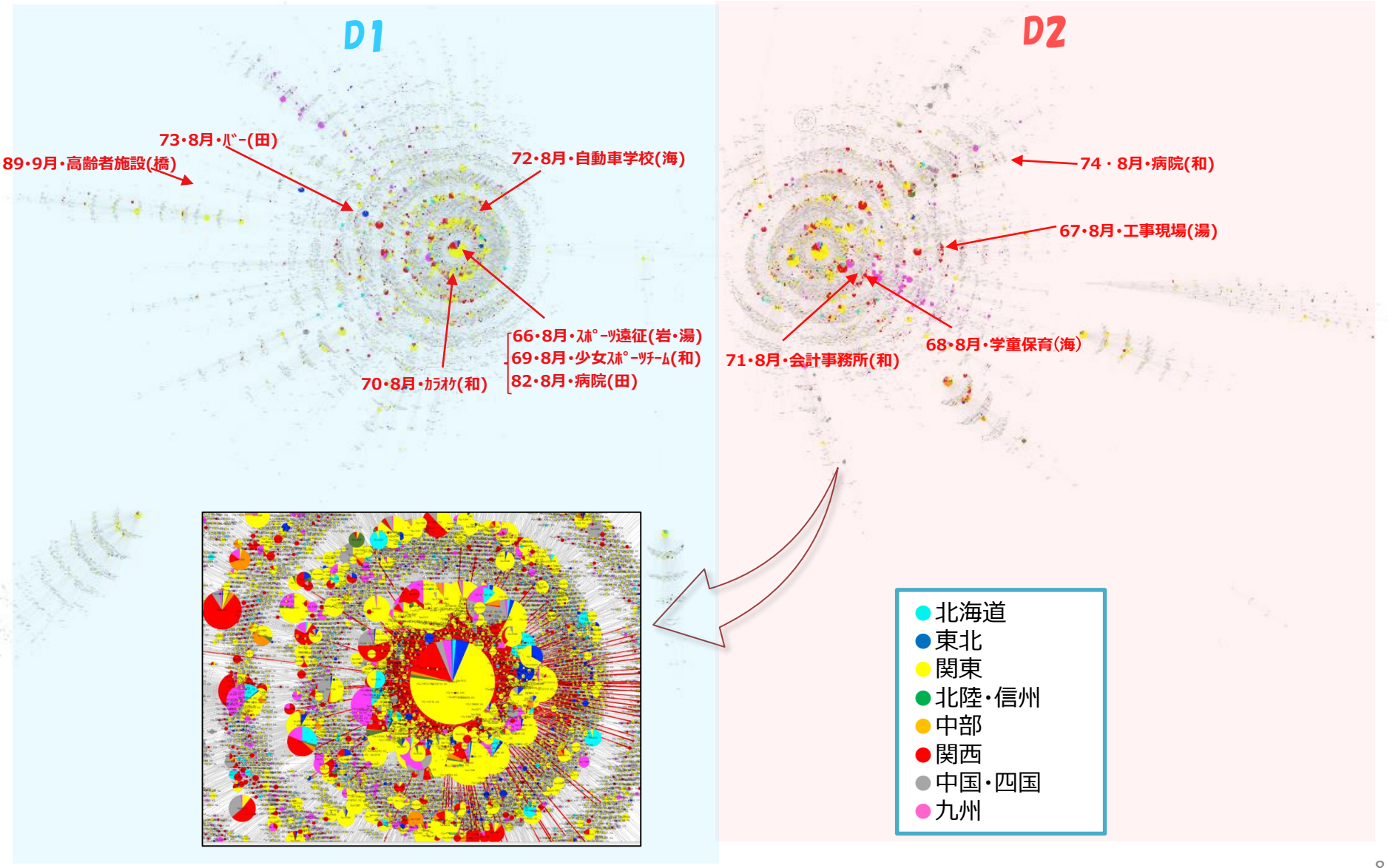

《和,県外》
1塩基差
《橋,県外》
《橋,県外》
《和,県外》
《岩,県外》
《和,県外》3塩基差
《和,県外》
44《和,ｸﾞﾙｰﾌﾟﾎｰﾑ》
《橋,県外》
《海,不明》
《和,ｶﾗｵｹ》
《橋,県外》
《橋,県外》3塩基差
《和,不明》
《和・橋,不明》
《和,不明》
《和,不明》
《和,ｶﾗｵｹ》
《和,不明》
《田,県外》
39《田,病院》
《田,不明》
《田,不明》
2塩基差
《田,不明》
《和,不明》
《和,県外》
《和,県外》
《橋,不明》
《和,不明》
《和,県外》
《和,県外》
《和,不明》
《橋,県外》
《和,県外》
《和,不明》
《和,県外》
《和,県外》
《和,県外》
《和,不明》
《和,県外》
《和,県外》
《和,不明》
《和,県外》
《和,県外》
《和,不明

アルファ株の伝播事例

※クラスターを示す



デルタ株のゲノム解析とクラスター



デルタ株の伝播事例

※クラスターを示す

凡例
紫＝7月発生
桃＝8月発生
紺＝9月発生

《橋,県外》
《岩,県外》
《橋,県外》
《和,県外》
《和,県外》

《和,県外》
《橋,県外》
《橋,県外》
《岩,県外》
《橋,県外》
66《岩・湯,ｽﾎﾟｰﾂ遠征》
《橋,県外》
69《和,少女ｽﾎﾟｰﾂﾁｰﾑ》
《和,県外》
《和,不明》
《和,県外》
《和,不明》
82《田,病院》

2塩基差
《和,不明》
《橋,県外》

2塩基差
2塩基差
《和,県外》
《岩,県外》
《和,不明》
《岩,不明》
《新,県外》
《和,県外》
《和,不明》

《湯,県外》
《和,県外》
《和,県外》
《岩,不明》
《岩,県外》
《橋,県外》
《和,県外》
《和,県外》
《和

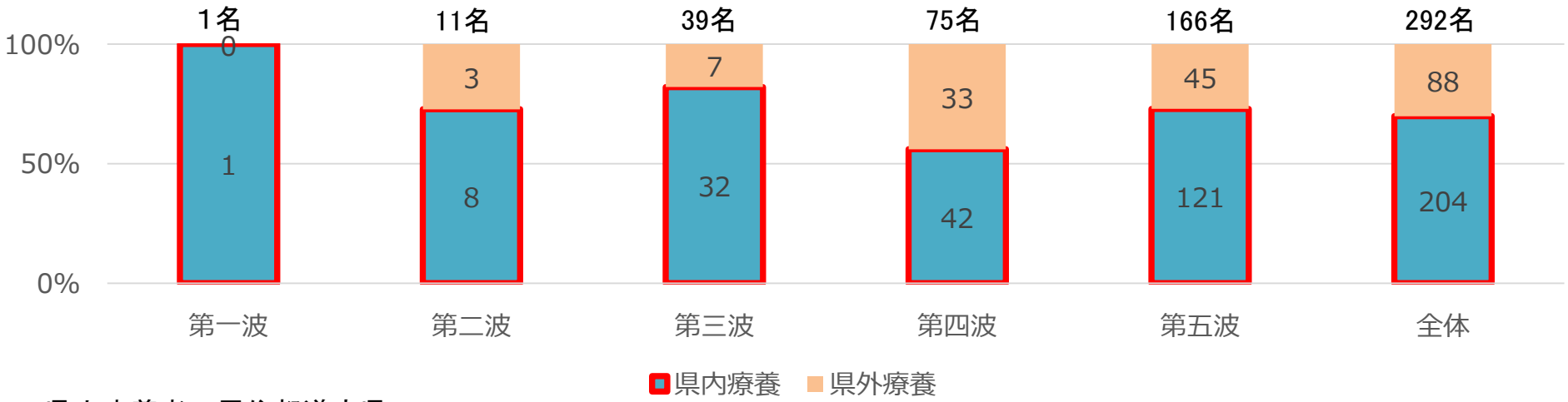
県外患者の受け入れ状況

県外在住陽性者の県内療養者の状況（波別）

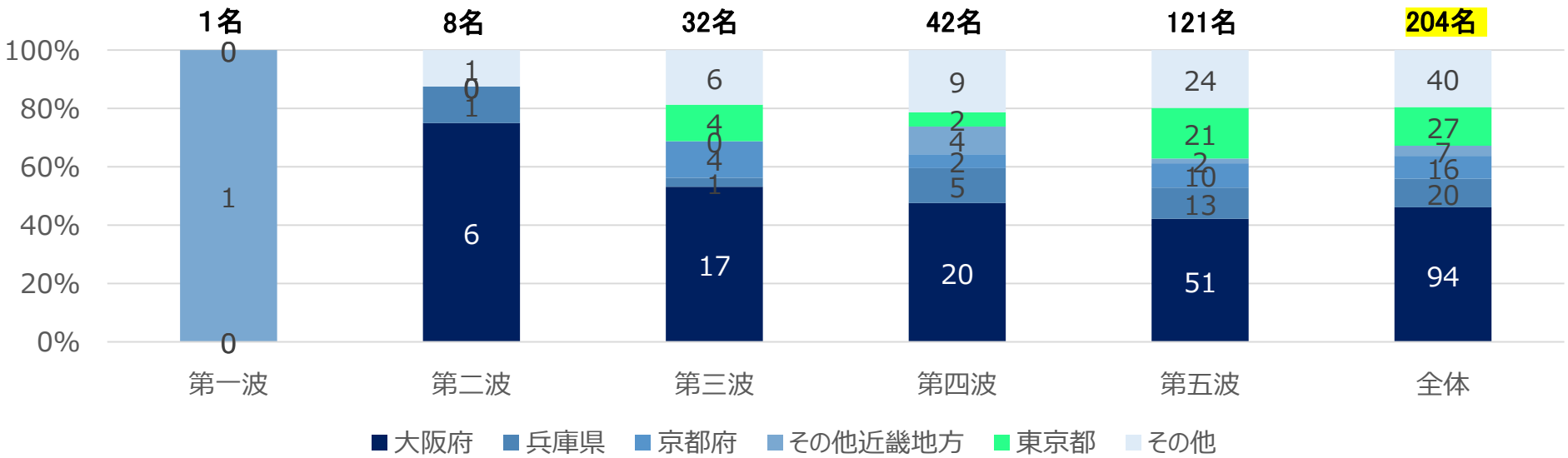
令和3年10月31日発表分まで

1. 和歌山県内での療養と県外療養の割合

※県外計上者を含む



2. 県内療養者の居住都道府県



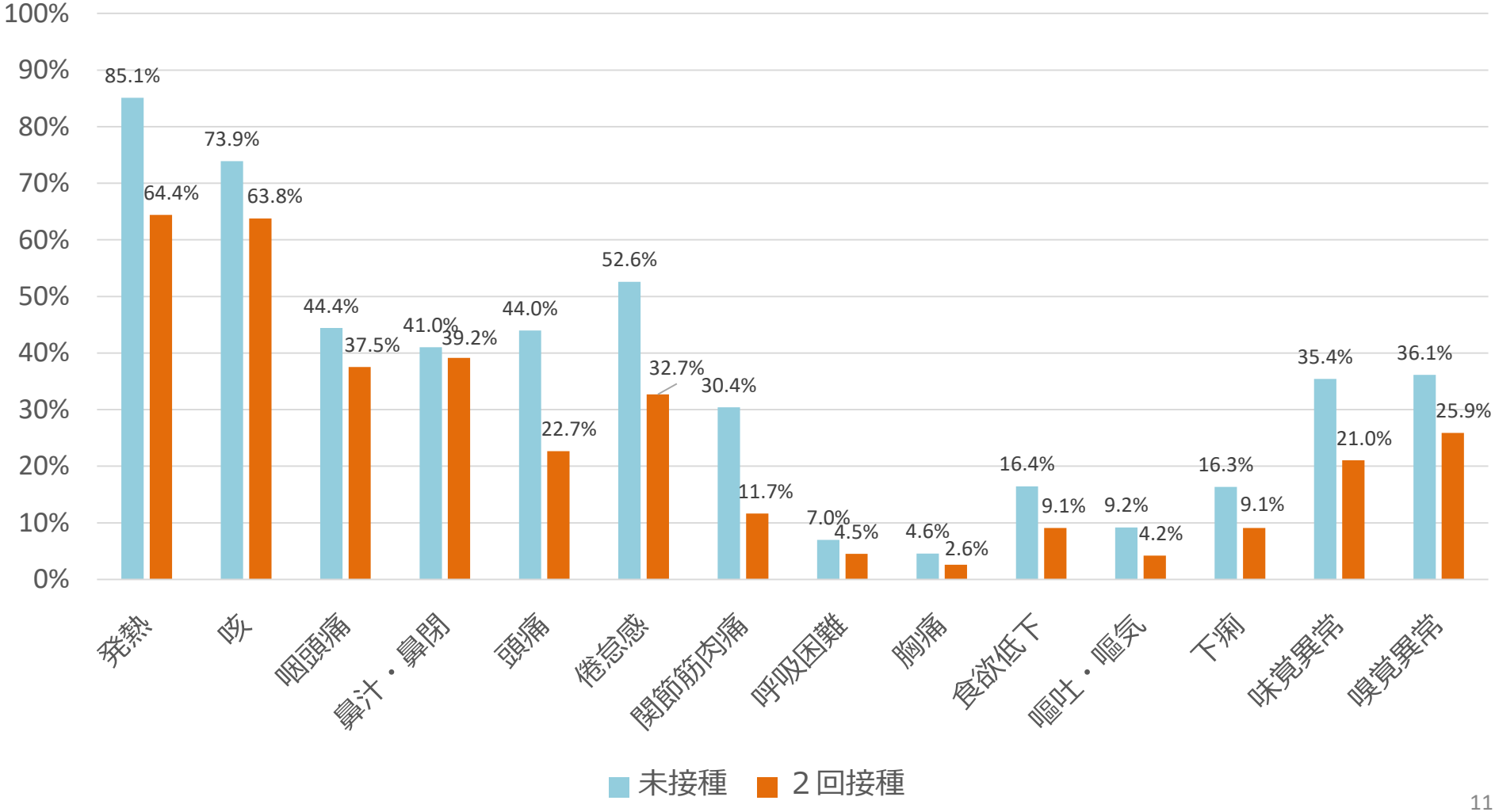
ワクチンと症状

ワクチンの接種状況と症状

※10月31日までに発表した第五波の陽性者

○ ワクチン２回接種感染者と未接種感染者の症状の出現を見ると、２回ワクチン接種の方が症状の出現率は低い。

○ これは、ワクチンの効果と考えられるが、一方、診断においてはこのことを理解の上、ＰＣＲ等検査を行うことが必要である。



感染者の経過

【R2.2.13～R3.10.31】当初症状と経過中の症状（n＝5,184）

○ 第一波～第五波の10月末までの陽性判明時に無症状であった者1,202名のうち無症状で経過したのは約24%で、肺炎を併発したのは約28%で、酸素投与が必要になったのは約6%であった。
○ 陽性判明時に有症状であった者3,982名のうち肺炎を併発したのは約38%で、酸素投与が必要になったのは約10%であった。

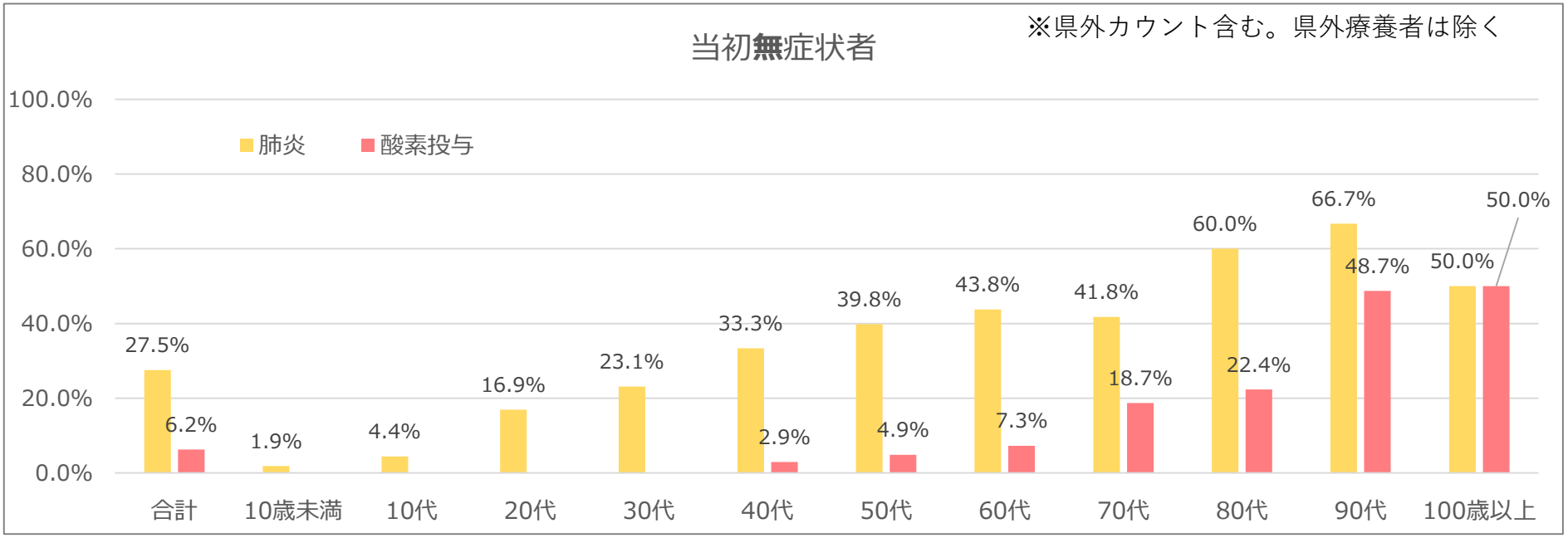
※県外カウント含む。県外療養者は除く

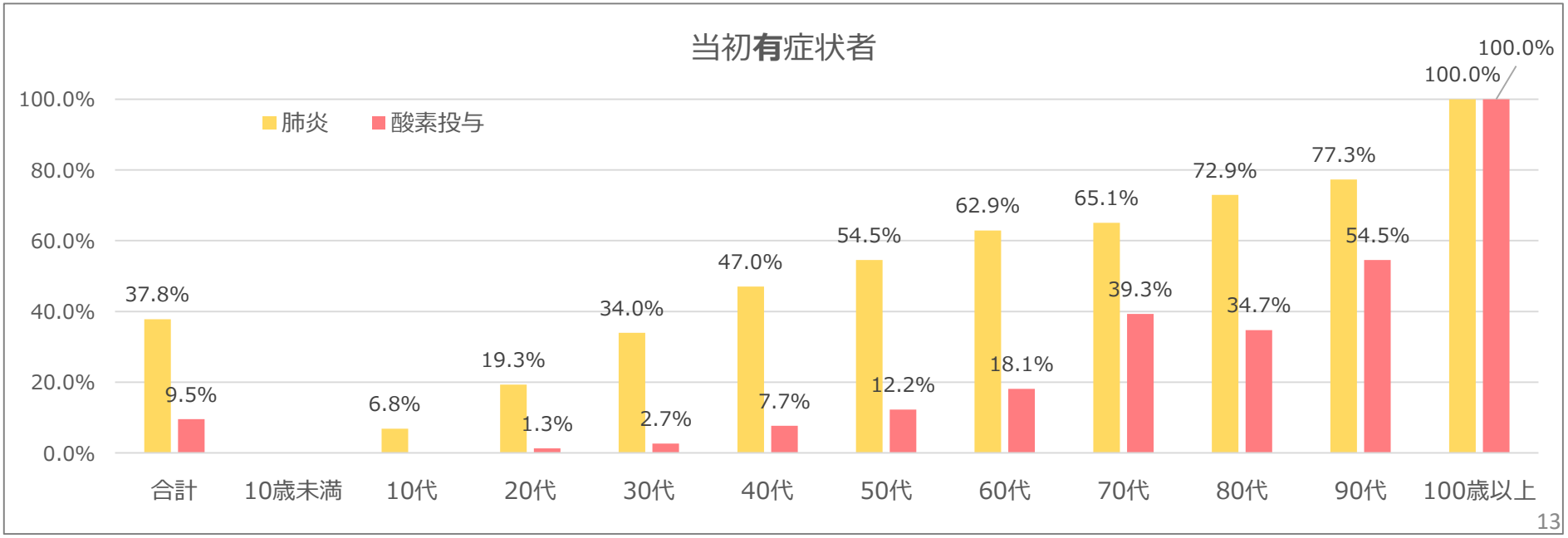
当初症状	経過中の症状			合計	乳児	幼児	10歳未満	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	100歳以上
無症状	無症状			283	2	26	20	57	54	23	28	23	16	19	12	2	1
無症状	軽症			588	10	44	33	95	93	70	86	51	38	34	22	11	1
無症状	肺炎			331	0	0	1	7	30	28	57	49	42	38	51	26	2
無症状	肺炎	重症（酸素投与）		75	0	0	0	0	0	0	5	6	7	17	19	19	2
無症状	肺炎	重症（酸素投与）	重症（ICU）	6	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	2	0	0
無症状	肺炎	重症（酸素投与）	死亡	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	6	9	1
無症状				1202	12	70	54	159	177	121	171	123	96	91	85	39	4
有症状	軽症			2476	17	52	58	449	694	346	338	260	125	88	39	10	0
有症状	肺炎			1506	0	0	0	33	166	178	300	312	212	164	105	34	2
有症状	肺炎	重症（酸素投与）		380	0	0	0	0	11	14	49	70	61	99	50	24	2
有症状	肺炎	重症（酸素投与）	重症（ICU）	46	0	0	0	0	0	2	5	10	12	11	5	1	0
有症状	肺炎	重症（酸素投与）	死亡	42	0	0	0	0	0	※(1)	0	0	4	4	24	9	0
有症状				3982	17	52	58	482	860	524	638	572	337	252	144	44	2
合計				5184	29	122	112	641	1037	645	809	695	433	343	229	83	6

※肺炎像を認めない（間接死因のため）

【R2.2.13～R3.10.31】当初症状別肺炎発症率

※県外カウント含む。県外療養者は除く



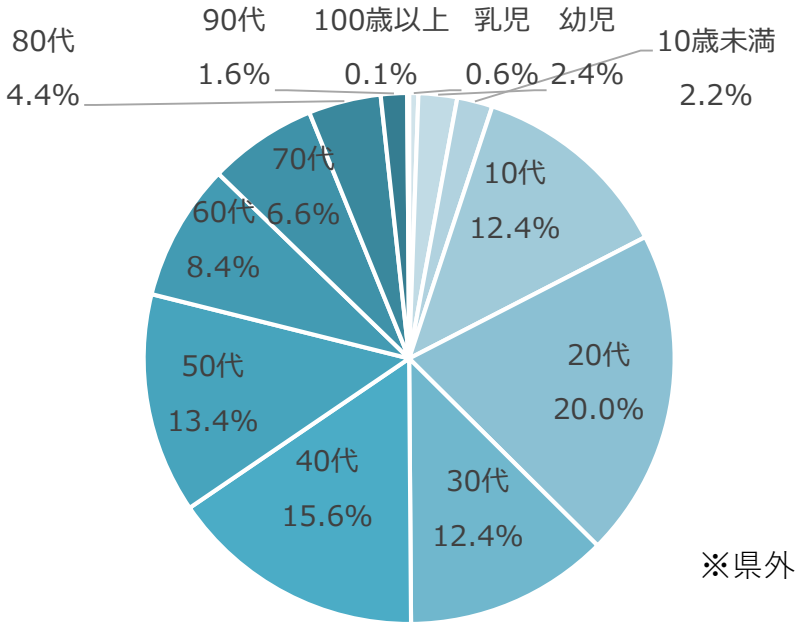


【R2.2.13～R3.10.31】 症状の経過と年齢構成（n＝5,184）

○ 第一波～第五波の10月末までの陽性判明者5,184名のうち無症状で経過したのは約6%で、肺炎を併発したのは約35%で、酸素投与が必要になったのは約9%であった。
○ ＩＣＵ入室者は1%、死亡者（間接死因含む）は、62名で致死率は1.2%であった。
○ 年代は20代が最も多かった。次いで、40代となっていた。

	全体	無症状	軽症	肺炎	酸素なし	酸素あり	ICU	死亡
人数	5,184	283	3,064	1,837	1,382	455	52	62
%	100.0%	5.5%	59.1%	35.4%	26.7%	8.8%	1.0%	1.2%

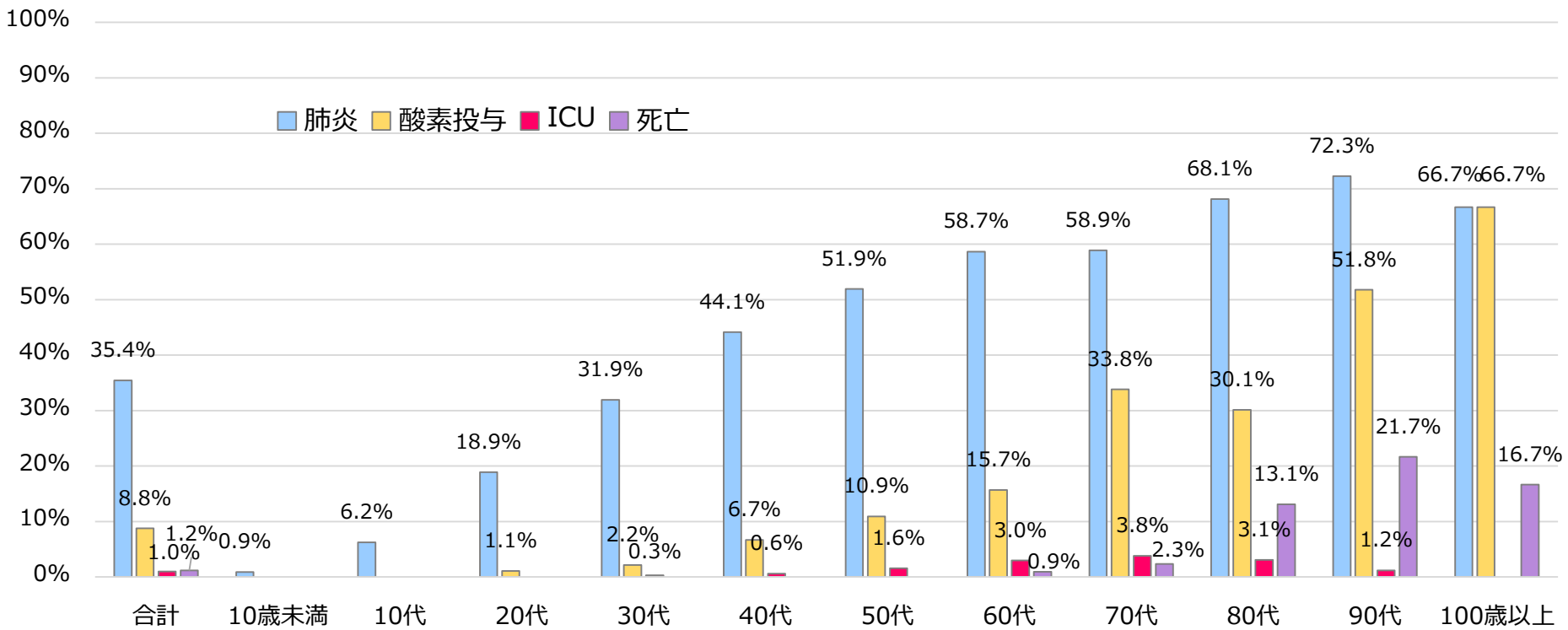
致死率　1.2%
（間接死因を含む）



※県外カウント含む。県外療養者は除く

【R2.2.13～R3.10.31】年代別　肺炎患者の症状経過（n=1,837）

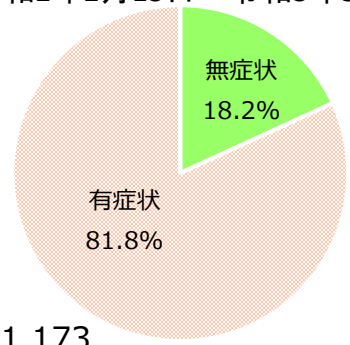
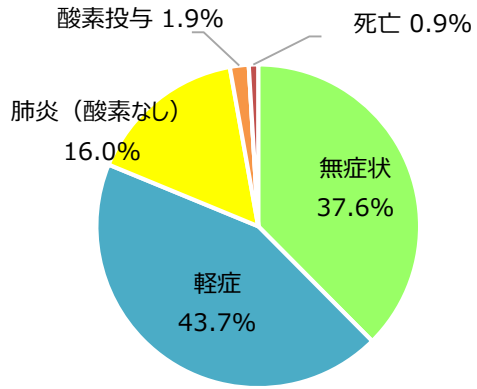
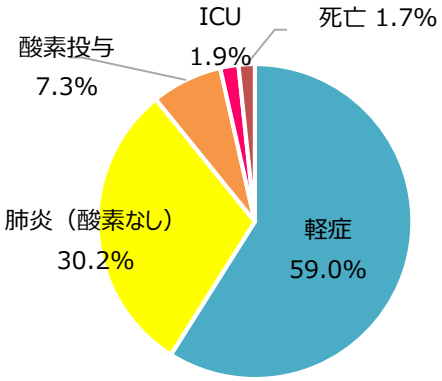
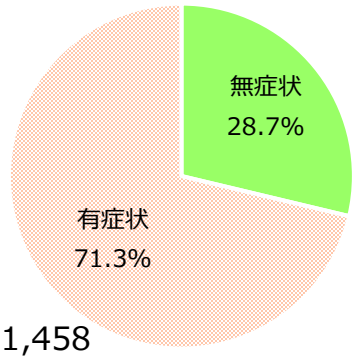
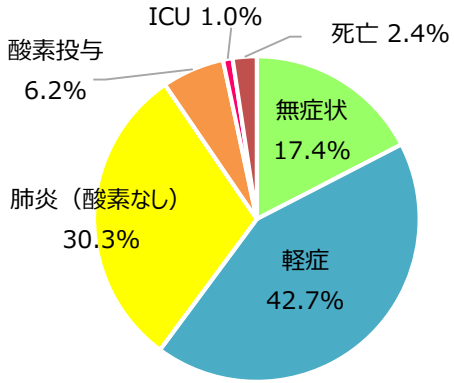
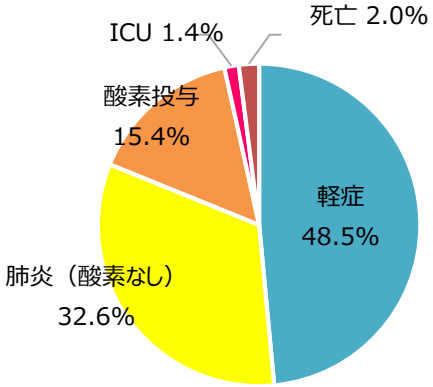
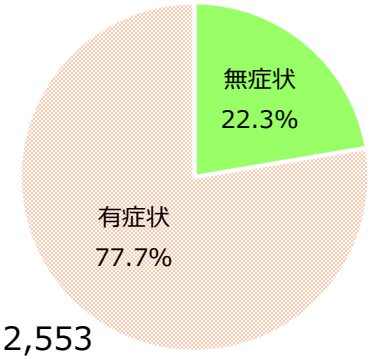
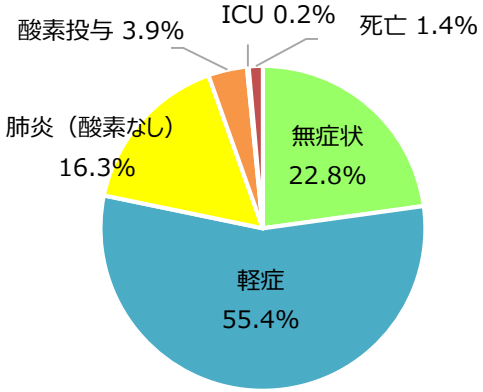
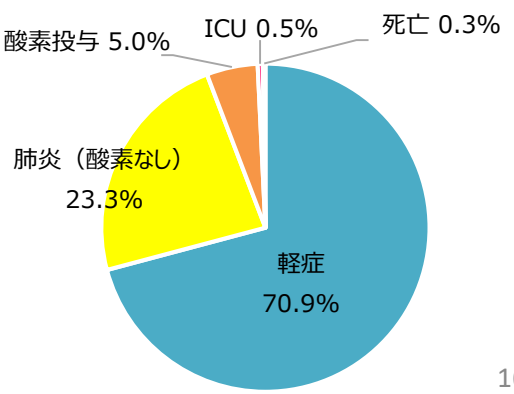
経過中の症状			合計	乳児	幼児	10歳未満	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	100歳以上
肺炎			1,837			1	40	196	206	357	361	254	202	156	60	4
			35.4%			0.9%	6.2%	18.9%	31.9%	44.1%	51.9%	58.7%	58.9%	68.1%	72.3%	66.7%
	重症（酸素投与）		455					11	14	54	76	68	116	69	43	4
			8.8%					1.1%	2.2%	6.7%	10.9%	15.7%	33.8%	30.1%	51.8%	66.7%
		重症（ICU）	52						2	5	11	13	13	7	1	
			1.0%						0.3%	0.6%	1.6%	3.0%	3.8%	3.1%	1.2%	
		死亡	61									4	8	30	18	1
			1.2%									0.9%	2.3%	13.1%	21.7%	16.7%
全体人数			5,184	29	122	112	641	1037	645	809	695	433	343	229	83	6



※県外カウント含む。県外療養者は除く

第1～3波、第4波、第5波の症状の経過（n=5,184）

※県外カウント含む
県外療養者は除く

時期	当初症状の有無	当初無症状	当初有症状
第1～3波	【令和2年2月13日～令和3年3月13日】  n=1,173	 	
第4波	【令和3年3月14日～7月10日】  n=1,458	 	
第5波	【令和3年7月11日～10月31日】  n=2,553	 	

第1～3波、第4波、第5波の症状の経過

時期	経過中の最高の重症度　※県外カウント含む。県外療養者は除く	致死率
第1～3波	【令和2年2月13日～令和3年3月13日】	1.5%
第4波	【令和3年3月14日～7月10日】	2.1%
第5波	【令和3年7月11日～10月31日】	0.5%

	全体	無症状	軽症	肺炎	酸素なし	酸素あり	ICU	死亡
人数	1,173	80	659	434	360	74	18	18
%	100.0%	6.8%	56.2%	37.0%	30.7%	6.3%	1.5%	1.5%

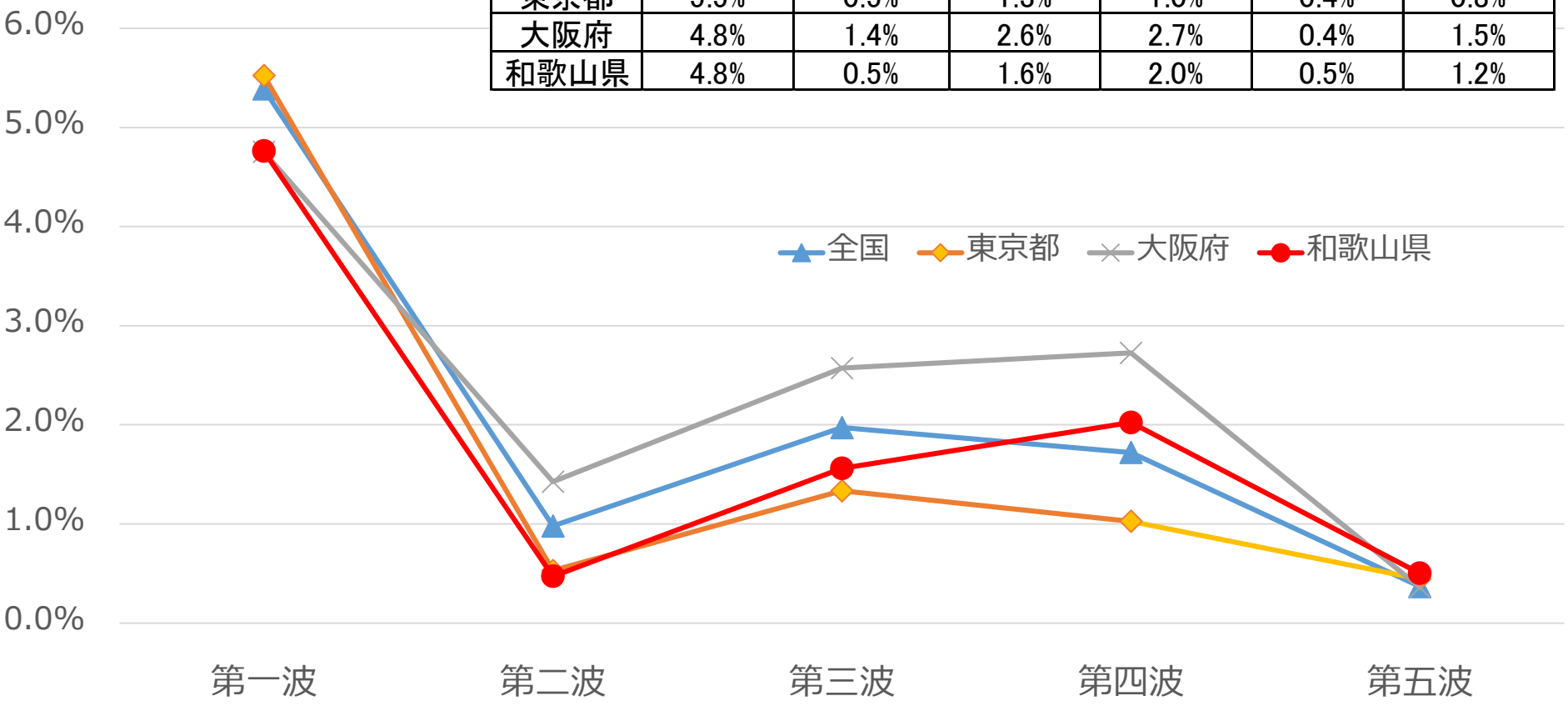
	全体	無症状	軽症	肺炎	酸素なし	酸素あり	ICU	死亡
人数	1,458	73	683	702	466	236	23	31
%	100.0%	5.0%	46.8%	48.1%	32.0%	16.2%	1.6%	2.1%

	全体	無症状	軽症	肺炎	酸素なし	酸素あり	ICU	死亡
人数	2,553	130	1,722	701	547	154	15	13
%	100.0%	5.1%	67.5%	27.5%	21.4%	6.0%	0.6%	0.5%

死亡率

致死率の推移（令和３年10月31日発表分まで）

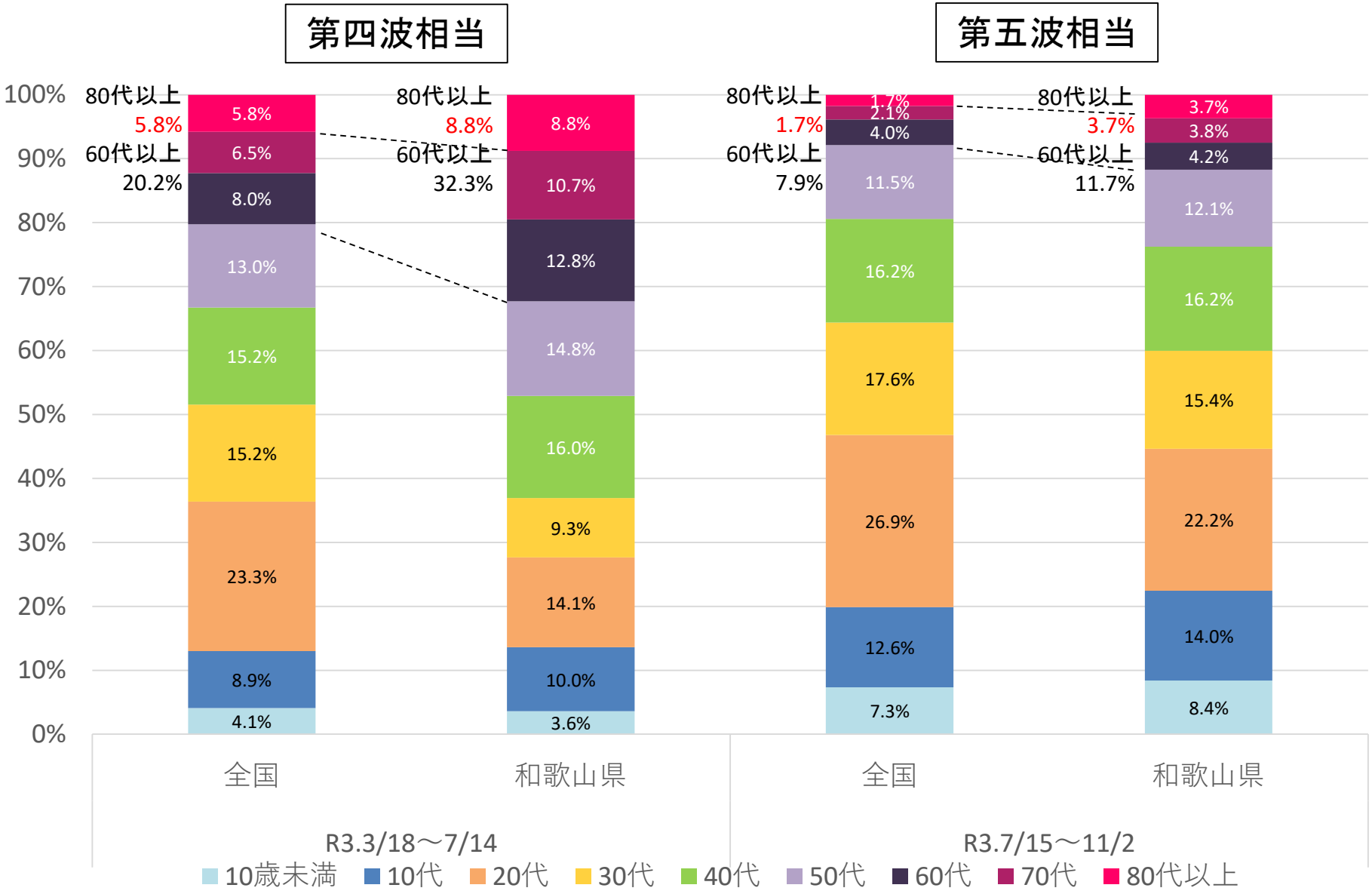
	第一波	第二波	第三波	第四波	第五波	通算
全国	5.4%	1.0%	2.0%	1.7%	0.4%	1.1%
東京都	5.5%	0.5%	1.3%	1.0%	0.4%	0.8%
大阪府	4.8%	1.4%	2.6%	2.7%	0.4%	1.5%
和歌山県	4.8%	0.5%	1.6%	2.0%	0.5%	1.2%



※　各自治体公表の陽性者数及び死亡者数による。全国数値は厚生労働省公表の陽性者数及び死亡者数による。
※　各波の期間は、和歌山県の基準による。

第一波　令和2年6月22日まで　　**第二波**　令和2年6月23日から10月31日まで　　**第三波**　令和2年11月1日から令和3年3月13日まで
第四波　令和3年3月14日から7月10日まで　　**第五波**　令和3年7月11日から

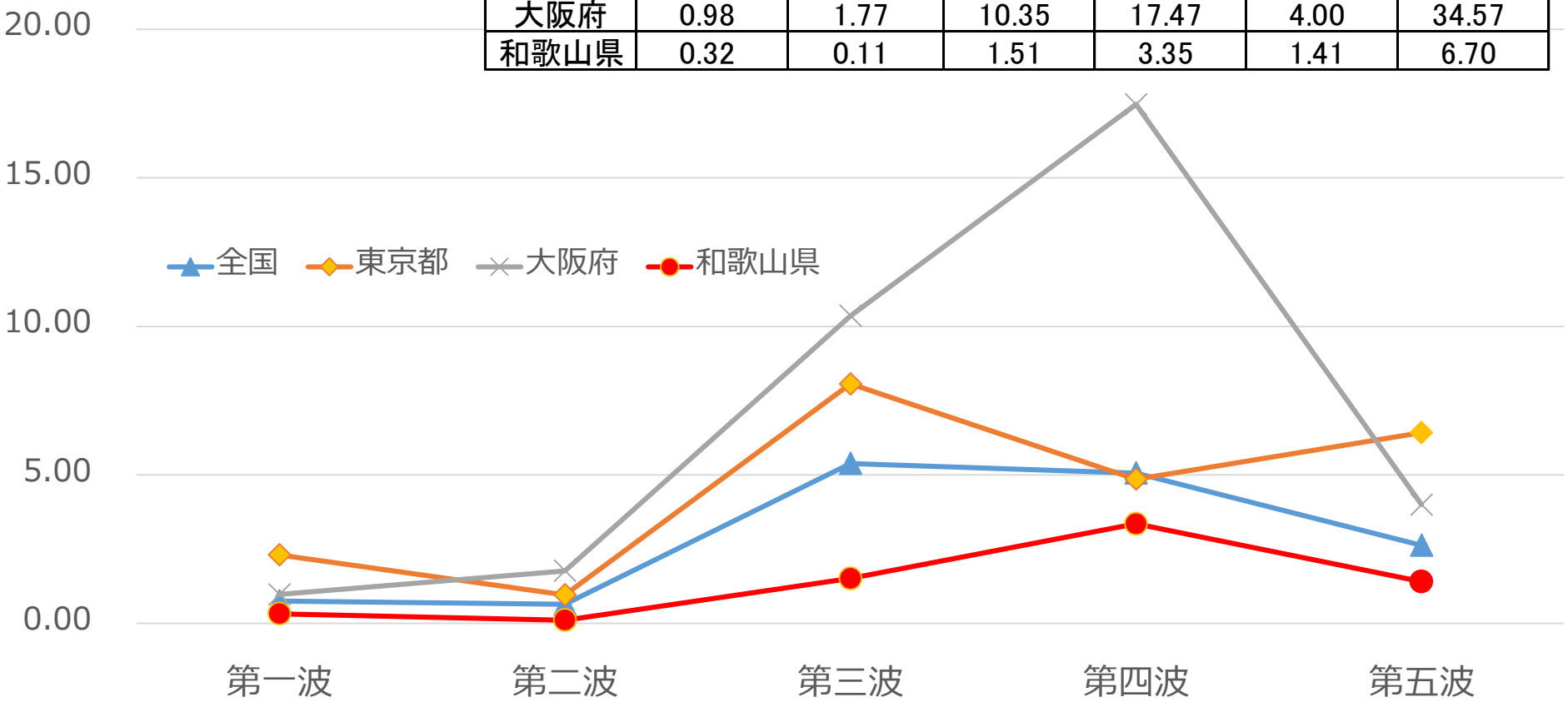
陽性者の年代構成の比較（全国・和歌山県）



※　全国数値は厚生労働省「新型コロナウイルス感染症の国内発生動向（速報値）」から算出している。
※　波の時期は和歌山県の基準によるが、厚生労働省の公表資料の関係上、和歌山県の基準の日時と一致していない。

死亡率（人口10万人当たり）の推移（令和３年10月31日発表分まで）

	第一波	第二波	第三波	第四波	第五波	通算
全国	0.76	0.64	5.38	5.06	2.63	14.47
東京都	2.31	0.96	8.06	4.86	6.42	22.61
大阪府	0.98	1.77	10.35	17.47	4.00	34.57
和歌山県	0.32	0.11	1.51	3.35	1.41	6.70



※　各自治体公表の死亡者数による。全国数値は厚生労働省公表の死亡者数による。
※　人口は、総務省発表の令和元年10月１日時点の推計人口を使用。
※　各波の期間は、和歌山県の基準による。

第一波　令和2年6月22日まで　**第二波**　令和2年6月23日から10月31日まで　**第三波**　令和2年11月1日から令和3年3月13日まで
第四波　令和3年3月14日から7月10日まで　**第五波**　令和3年7月11日から

その１．まとめ

○ これまでの第一波から第五波では、感染者は和歌山市が約半数を占め、次いで隣接する岩出保健所管内が多く、夏にクラスターが発生した田辺保健所、大阪に隣接する橋本保健所が多い。

○ 感染者が急増した第三波以降、感染経路不明者が多くなっているが、30%は超えておらず、保健所の疫学調査が機能している。

○ しかしながら、ゲノム解析では、県外からの持ち込みなどから県内の各保健所管内に広がり、また経路不明者は県外持ち込み例や県内で感染した例と同じ遺伝子系列である事例が多く、市中感染が考えられるとともに、感染が急拡大すると疫学調査が不十分になる傾向が見られる。今後とも、感染者は、保健所の疫学調査に積極的に協力することが求められる。

○ これまで、204名の県外在住患者を県内医療機関で入院の受け入れを行ってきた。

○ 全例入院体制を行った結果、感染者の病状の経過として、陽性判明時に無症状であっても、30%近くが、その後肺炎を併発し、酸素投与が必要となった者は約6%であったことが判明した。また、当初から有症状者の方が肺炎や酸素投与が必要になる者が多かったことも判明した。

○ 肺炎になり、酸素投与が必要となったのは、20代以上で年代が高くなるとともに多くなることが判明した。ＩＣＵで治療が必要となった重症者は30代以上で、特に、70代が最も高かった。有症状者の死亡者は、60代以上の者であった。

○ 本県のこれまでの感染者の致死率は1.2%で、第四波と第五波では全国よりやや高いが、これは、高齢者のクラスターが発生したこと等により、感染者のうちの高齢者の割合が高いことが原因と考える。

○ しかし、死亡率を比較すると、第四波、第五波においても、全国や感染が爆発し、医療提供体制が破綻したとされる東京、大阪と比較しても低く抑えられている。

○ これらのことから、今後とも、早期受診、早期診断による早期発見、全例入院による早期隔離・早期治療、積極的疫学調査の徹底、データの分析・活用を継続的に行っていくことが重要と考える。

その２．後遺症

第二回新型コロナウイルス後遺症アンケート調査結果

目　　的：和歌山県における新型コロナウイルス感染者の退院後の症状や生活状況等を把握し、感染予防の重要性を啓発する

対 象 者：新型コロナウイルス感染者で令和２年9月以降に入院し、令和３年6月３０日時点で退院後2週間以上経過している者

※前回の対象者は、新型コロナウイルス感染者で令和２年９月14日時点で退院後２週間以上経過している者

実施時期：令和3年７月

実施方法：感染者の管轄保健所からの郵送若しくは聞き取り調査

対象者数：２，２３８人

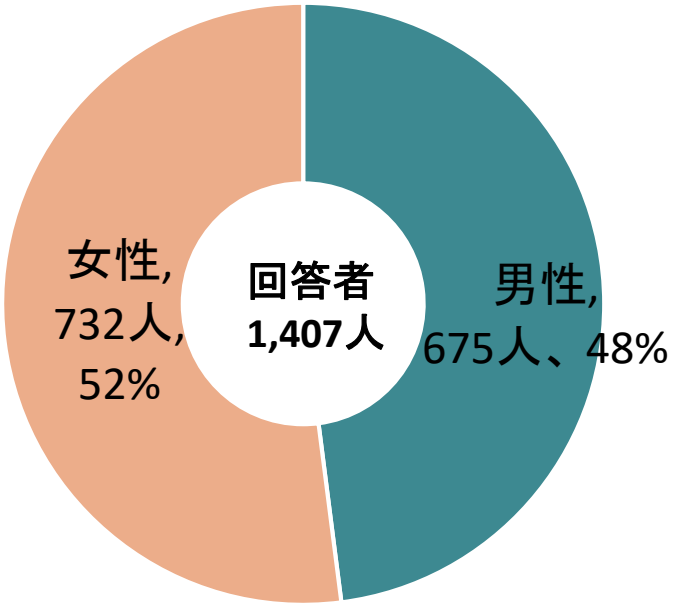
回答者数：１，４０７人（有効回答数）

回 答 率：６２．９％

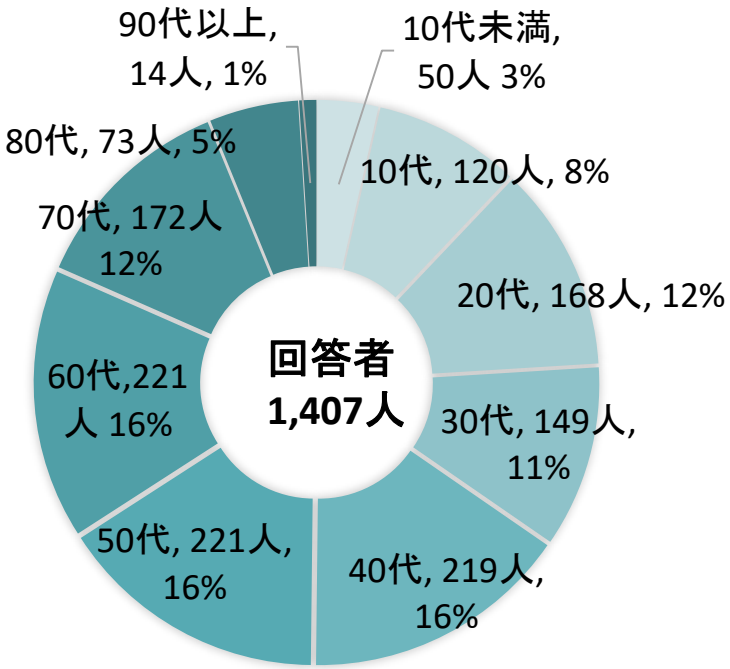
回答者の性別・年齢別状況

○ 回答者１，４０７人中、男性６７５人（４８％）、女性７３２人（５２％）であった。
○ 年代別では、４０～６０代で半数を占め、１０～３０代がそれぞれ約1割であった。

【性別】



【年代別】



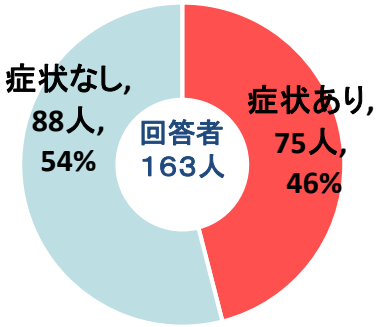
有症状者の状況（男女別）

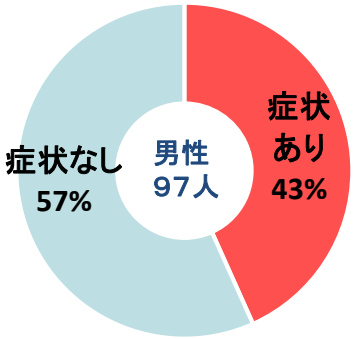
○ 回答者１，４０７人中、退院後何らかの症状がある人は７７２人（５５％）で、男性６７５人中 ３４６人（５１％）、女性７３２人中４２６人（５８％）であり、女性の方が有症状者の割合が高かった。

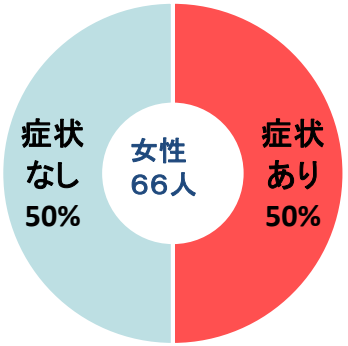
○ 有症状者の割合は、前回の調査の４６％と比べ５５%と高くなっている。

前回

【有症状者の割合】

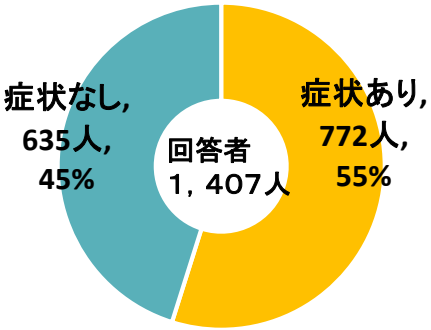


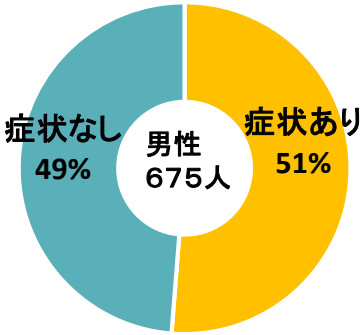


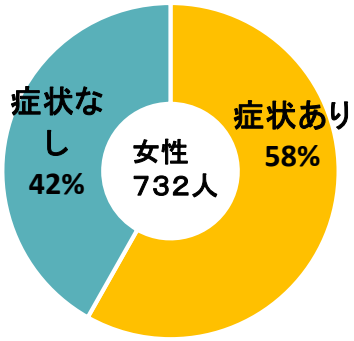


今回

【有症状者の割合】







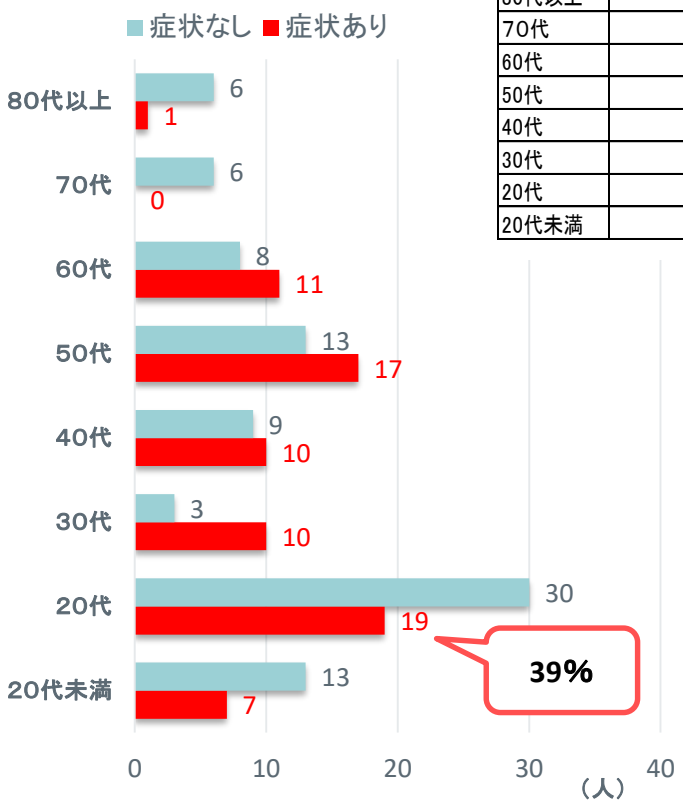
有症状者の状況（年代別）

○ 年代別では、２０～７０代の有症状者の割合が５０％以上で、特に３０～５０代では６０％以上と高くなっている。10代は29%と少なく、10歳未満の小児は12%と最も少なかった。
○ 年代別では、４０代が有症状者の割合が最も高い。
○ 前回に比べると、特に２０代の有症状者割合が３９％から<u>５５％と高く</u>なっている。

前回

年代別有症状者 （n＝163人）

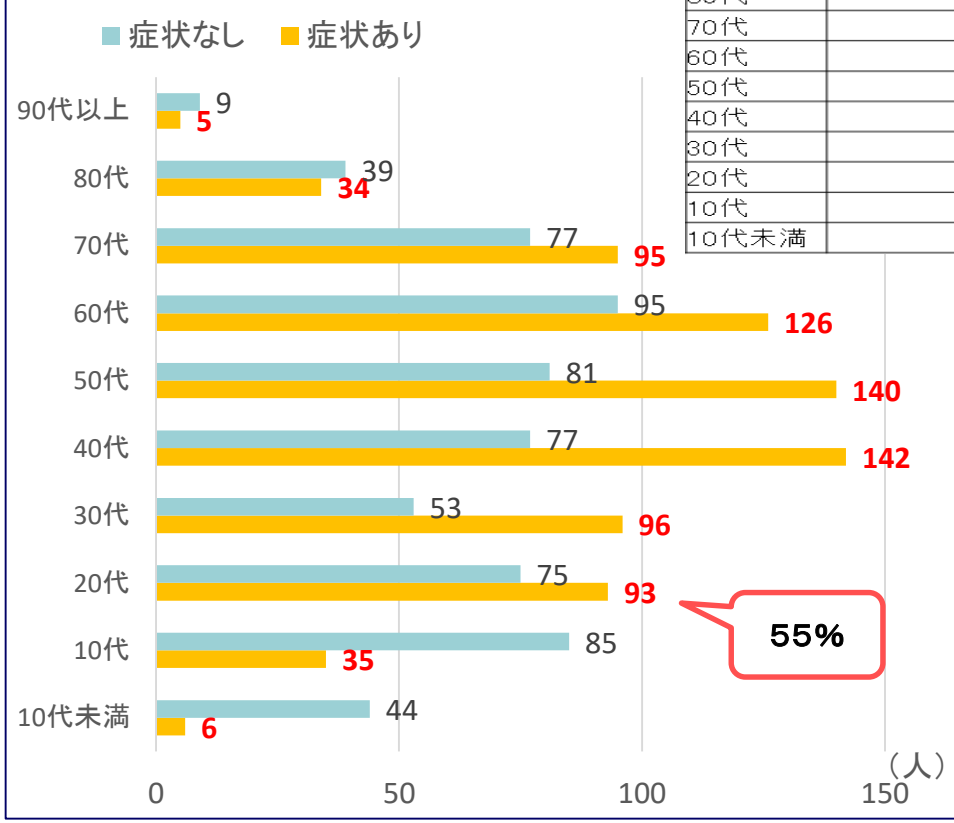
年代	有症状者割合
80代以上	14%
70代	0
60代	58%
50代	57%
40代	53%
30代	77%
20代	39%
20代未満	35%



今回

年代別有症状者 （n＝1,407人）

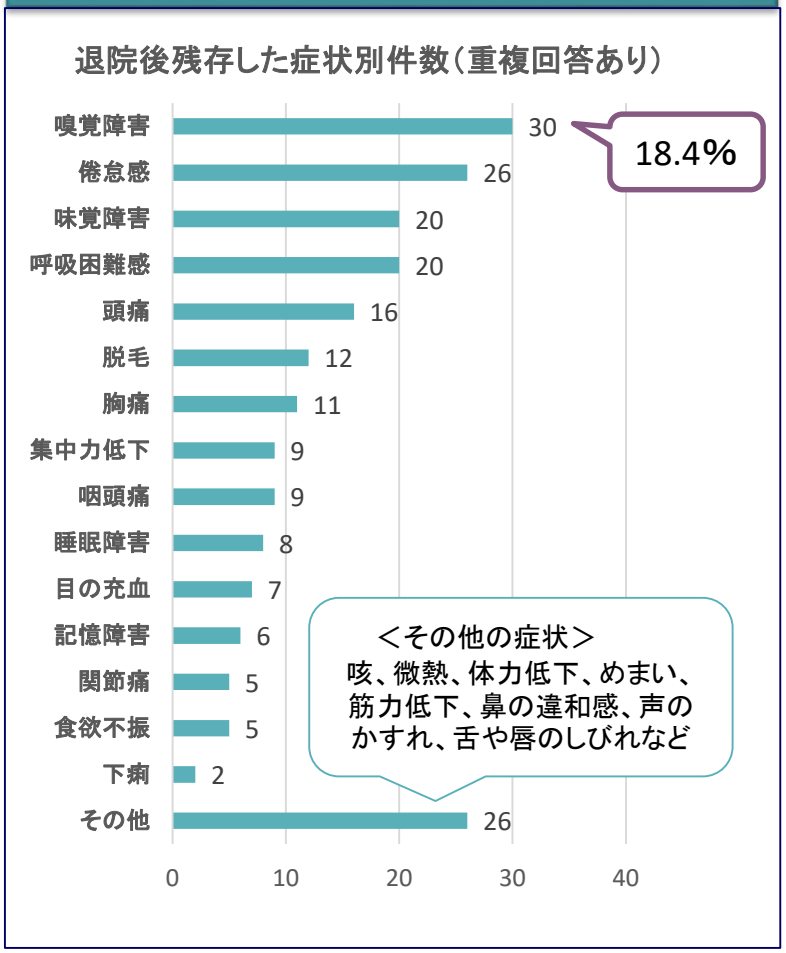
年代	有症状者割合
90代以上	36%
80代	47%
70代	55%
60代	57%
50代	63%
40代	65%
30代	64%
20代	55%
10代	29%
10代未満	12%



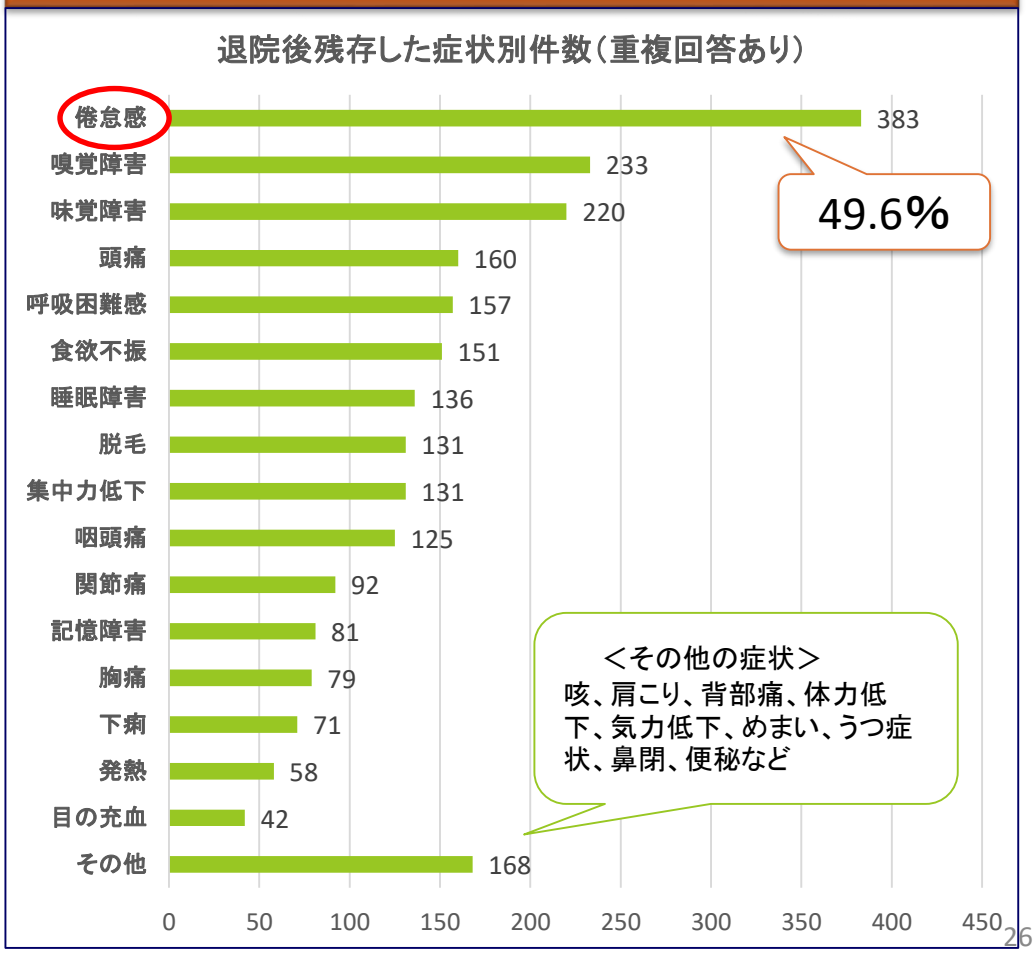
退院後の症状（全体）

○ 退院後何らかの症状がある７７２人のうち、症状で最も多かったのは、倦怠感であった。
続いて嗅覚障害、味覚障害、頭痛、呼吸困難感が多かった。
○ 前回との比較では、上位5つの症状は同じであるが、今回は、有症状者の５割近くで倦怠感の症状が出現していた。
○ 前回に比べ、食欲不振を訴える人も多かった。

前回



今回



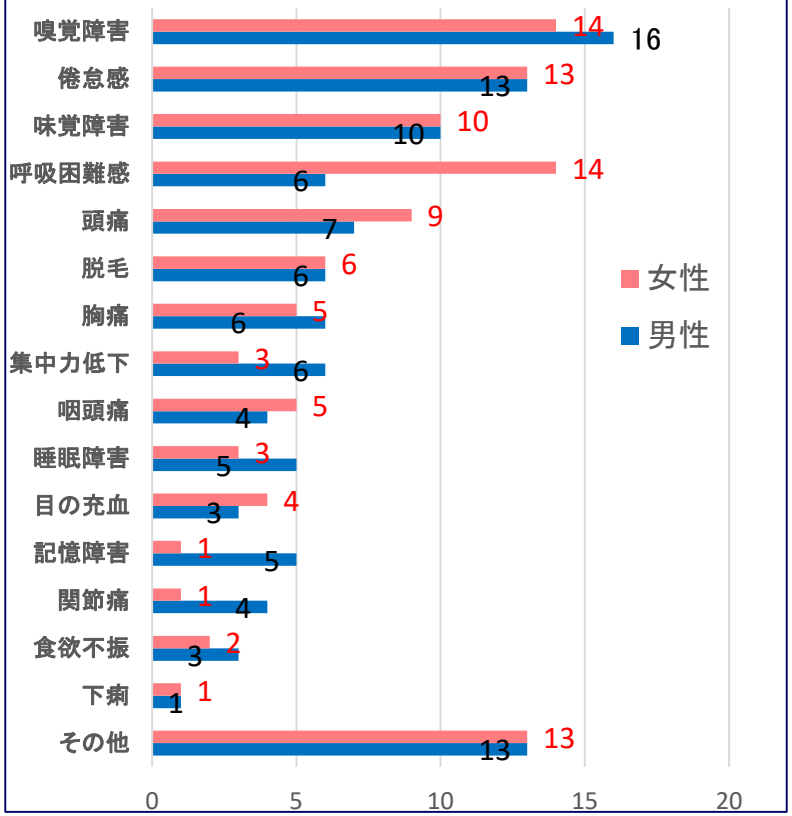
退院後の症状（性別）

○ 退院後何らかの症状がある７７２人（男性３４６人、女性４２６人）の男女別では、比較的女性の方が男性より症状の出現が多かった。

○ 症状別では、男女ともに倦怠感、嗅覚障害、味覚障害が多く、次いで、男性は、呼吸困難感や集中力低下、女性は、頭痛や食欲不振、呼吸困難感が多かった。脱毛については、女性は男性の約２倍となっている。

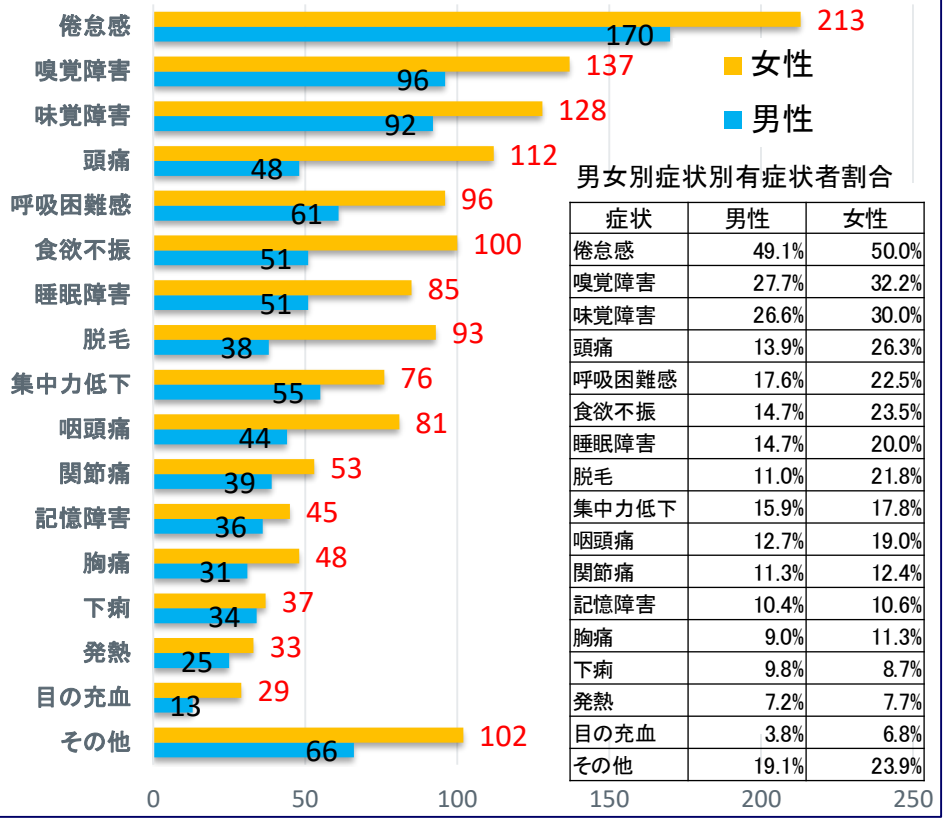
前回

退院後残存した症状別件数（男女別）＊重複回答あり



今回

退院後残存した症状別件数（男女別）　＊重複回答あり



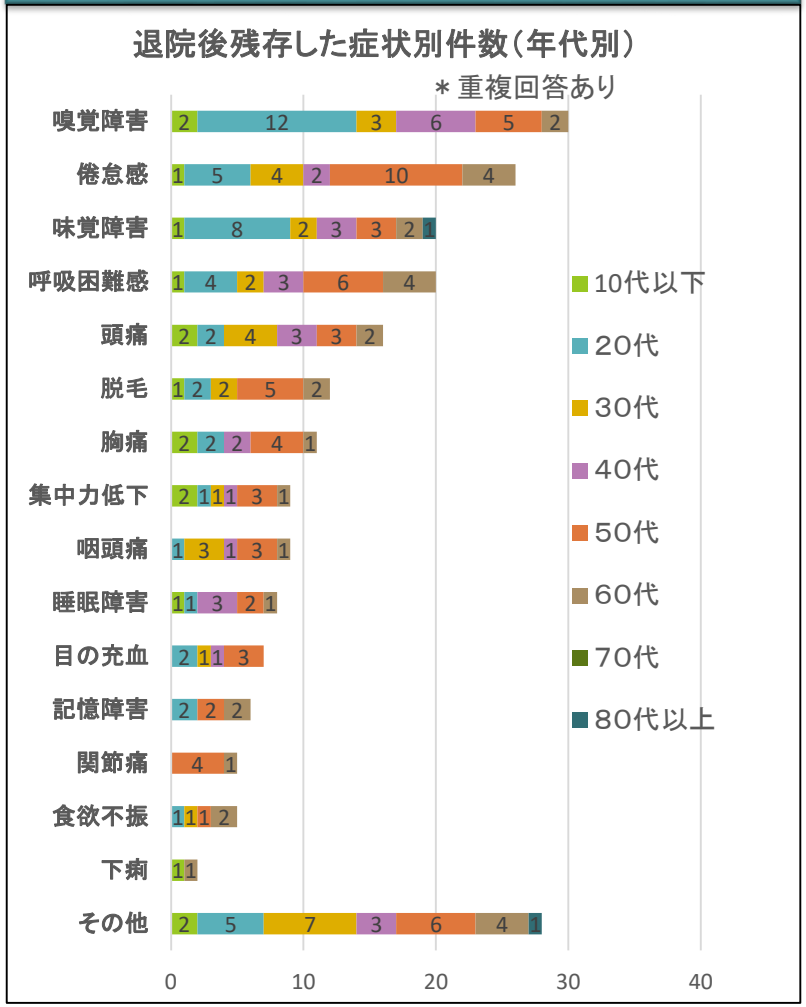
男女別症状別有症状者割合

症状	男性	女性
倦怠感	49.1%	50.0%
嗅覚障害	27.7%	32.2%
味覚障害	26.6%	30.0%
頭痛	13.9%	26.3%
呼吸困難感	17.6%	22.5%
食欲不振	14.7%	23.5%
睡眠障害	14.7%	20.0%
脱毛	11.0%	21.8%
集中力低下	15.9%	17.8%
咽頭痛	12.7%	19.0%
関節痛	11.3%	12.4%
記憶障害	10.4%	10.6%
胸痛	9.0%	11.3%
下痢	9.8%	8.7%
発熱	7.2%	7.7%
目の充血	3.8%	6.8%
その他	19.1%	23.9%

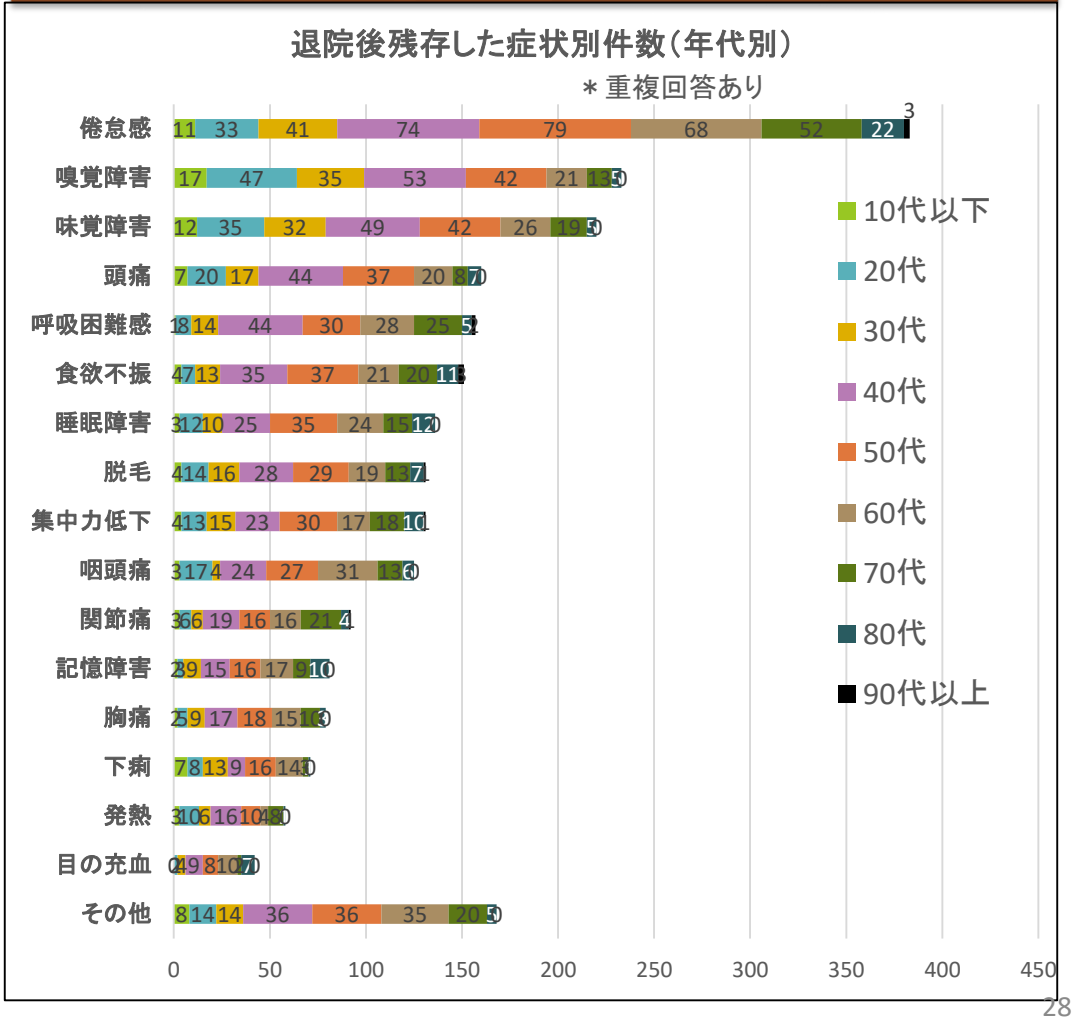
退院後の症状（年代別）

○ 症状で最も多かった倦怠感では、５０代が最も多かった。
○ 前回で最も多かった嗅覚障害は、４０代が最も多かった。
○ 味覚障害、頭痛、呼吸困難感の症状は、４０代が最も多かった。

前回

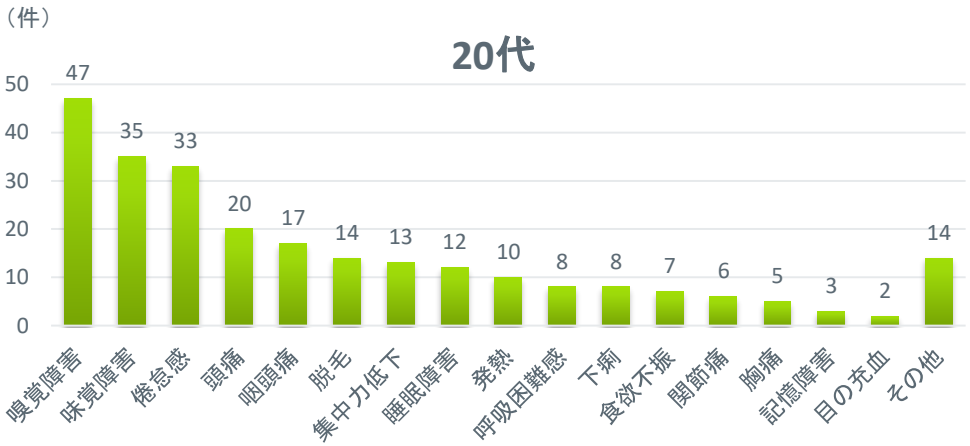


今回

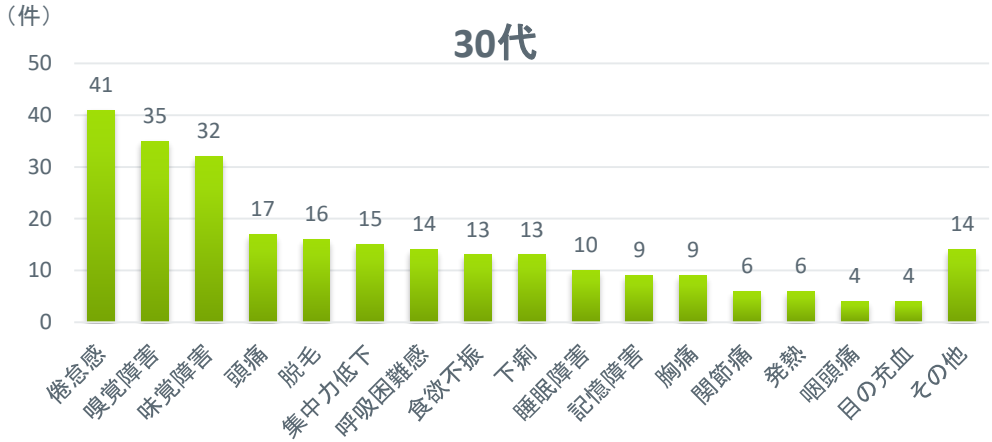


退院後の症状（年代別）　＊重複回答あり

○　年代別の有症状者割合は、１０代以下が最も少なく１７０人中４１人（24%）であり、症状としては、嗅覚障害が多く、次いで味覚障害、倦怠感となっている。
○　２０代も１０代以下と同じく、嗅覚障害が最も多く、次いで味覚障害、倦怠感となっている。
○　３０代は、倦怠感が最も多く、次いで嗅覚障害、味覚障害となっている。

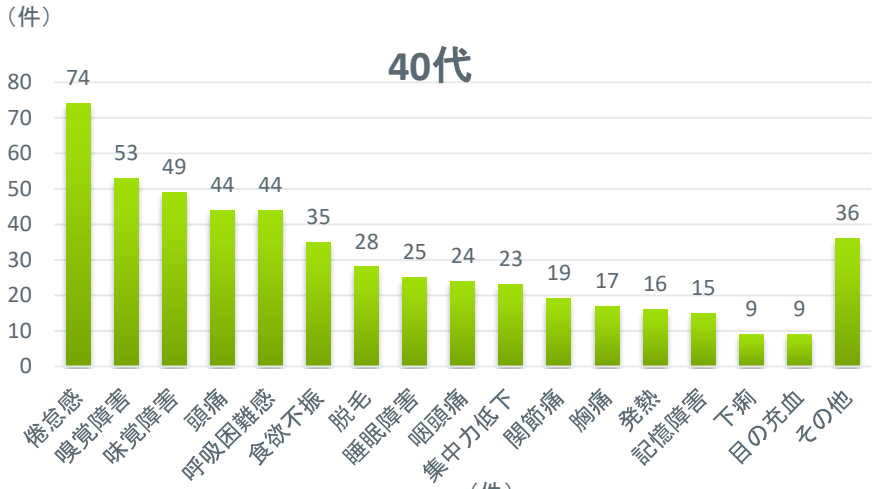


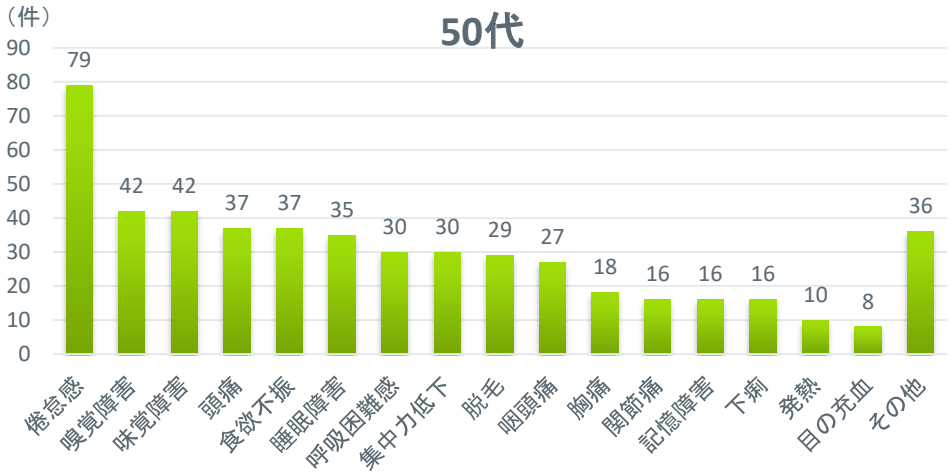
＊10歳未満の症状：
倦怠感、頭痛、下痢、
嗅覚障害、発熱など

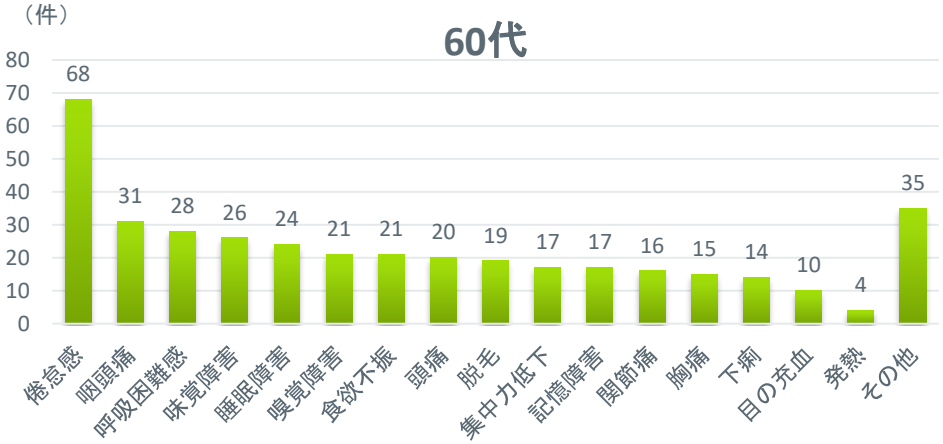


退院後の症状（年代別）　＊重複回答あり

○　４０代は、倦怠感が最も多く、多くの症状が出現している。次いで、嗅覚障害が多く、味覚障害頭痛となっている。
○　５０代では、倦怠感が最も多く、　５０代有症状者の５６％に出現しており、他の症状のほぼ２倍となっている。
○　６０代も、倦怠感が最も多く、他の症状の２倍～３倍となっている。次いで、咽頭痛、呼吸困難感となっている。

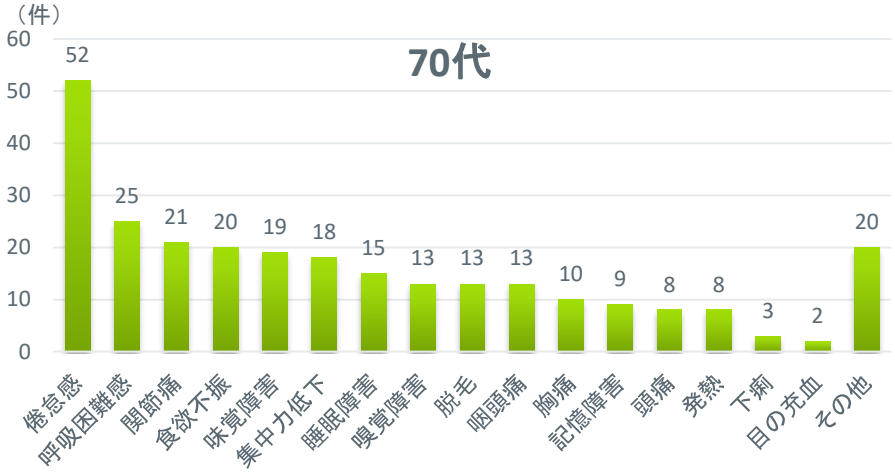


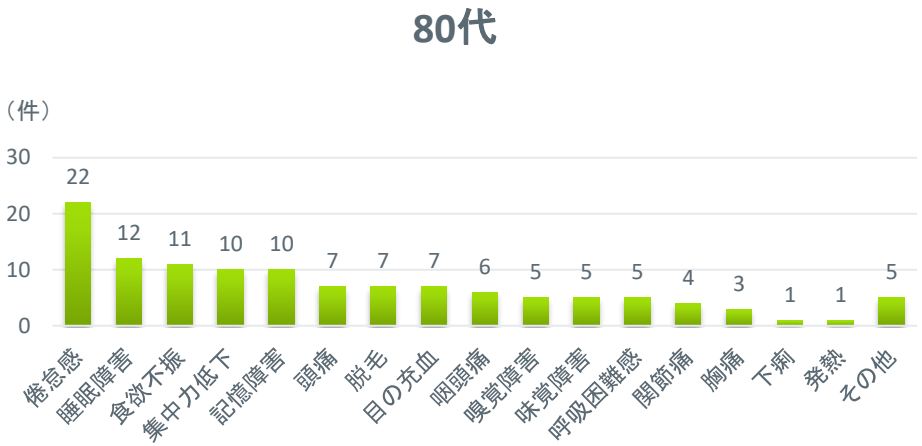


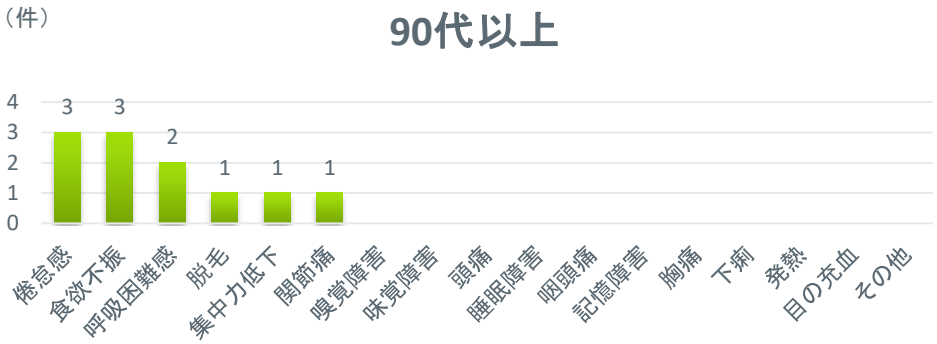


退院後の症状（年代別）　＊重複回答あり

○　７０代も、倦怠感が最も多く、他の症状と比べ２倍以上となっている。次いで、呼吸困難感、関節痛となっている。
○　８０代では、倦怠感が最も多いものの、年齢別の有症状者割合が減っており、症状も少なくなっている。
○　９０代以上では、年齢別の有症状者割合が１０代以下についで少なく３６％であり、症状も少なくなっている。

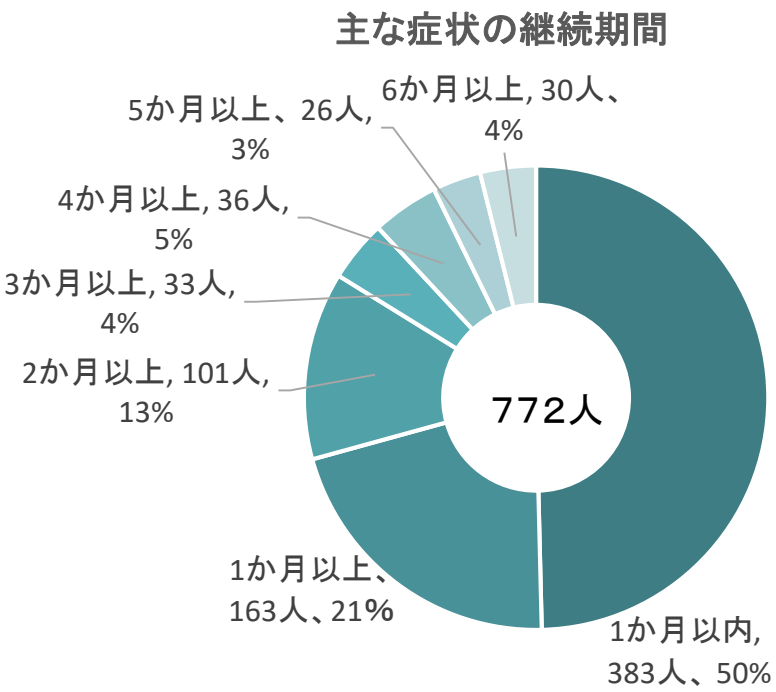


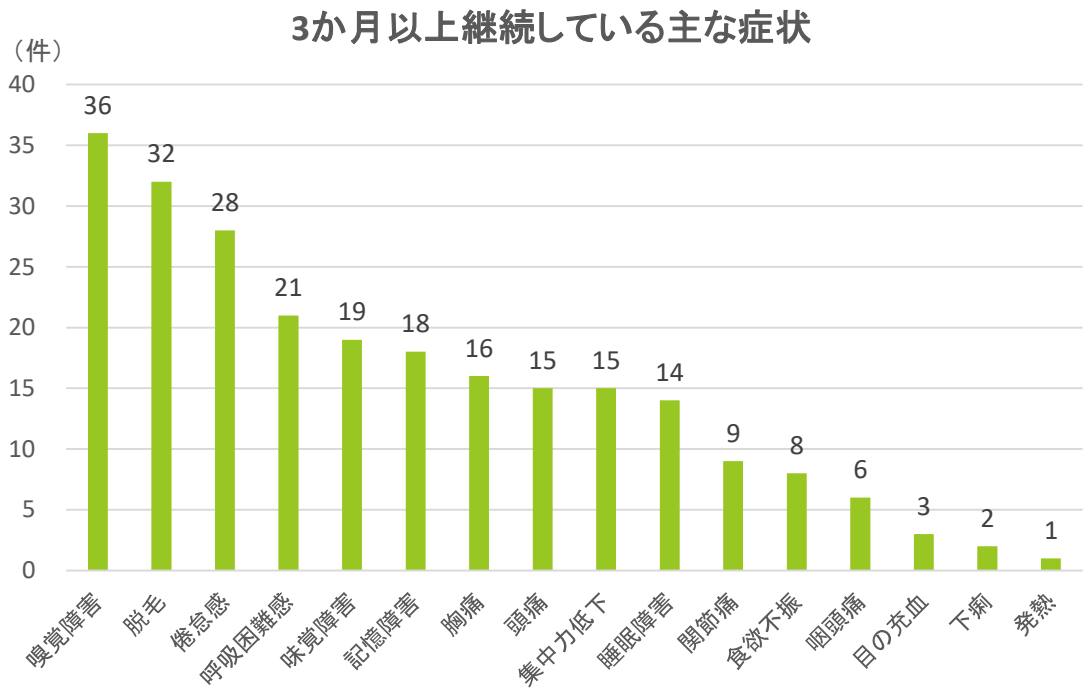




退院後の症状（継続期間）　＊重複回答あり

○　退院後何らかの症状が続いている者の内、１か月以上継続している者は半数であった。
○　３か月以上継続している者は、125人（１6%）であり、症状としては、嗅覚障害が最も多く、次いで、脱毛、倦怠感が多くなっている。

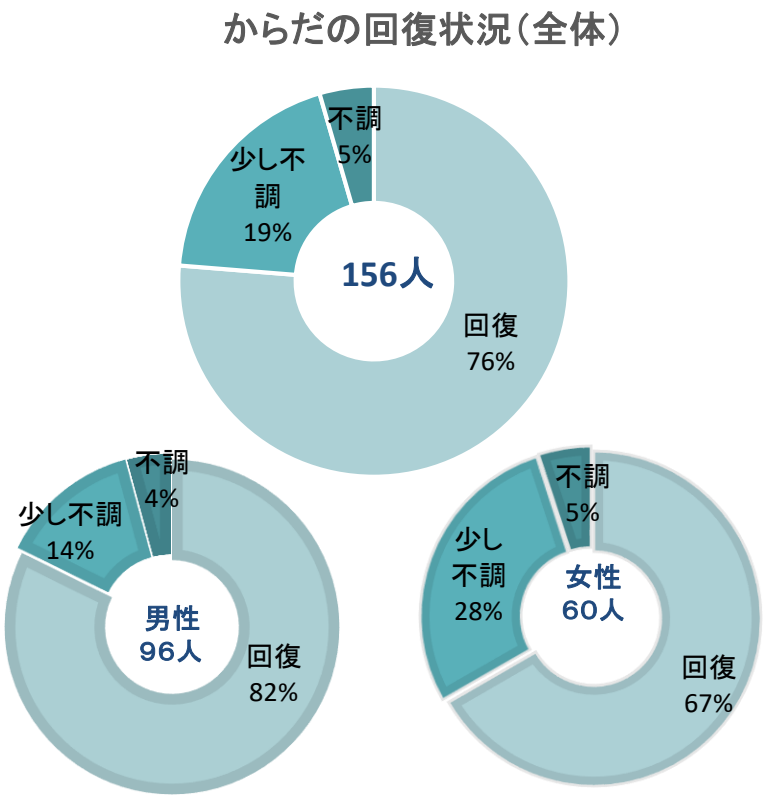




退院後の回復状況（性別）

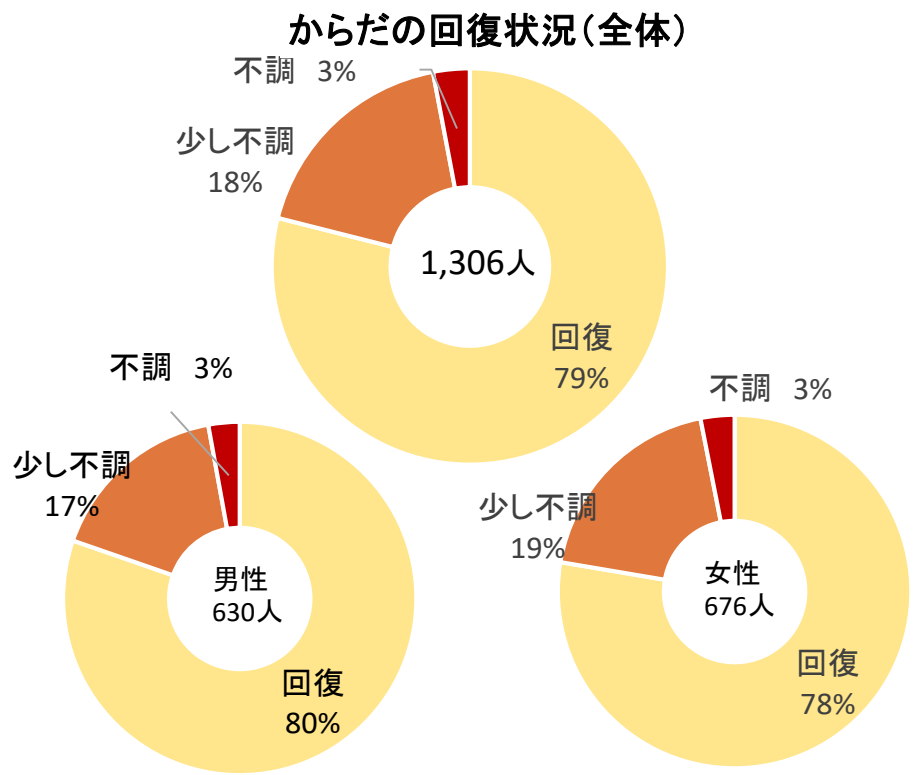
○ 令和３年５月までの退院者（無回答を除く）１，３０６人に、退院後に体調が回復しているかどうかを聞いたところ、回復しているが１，０３１人（７９％）、少し不調が２３６人（１８％）、不調が３９人（３％）であった。
○ 男女別の回復状況では、回復しているが男性８０％、女性７８％とほぼ同じであった。
○ 前回と比較すると、全体の回復状況は、ほぼ同じ割合である。

前回



今回

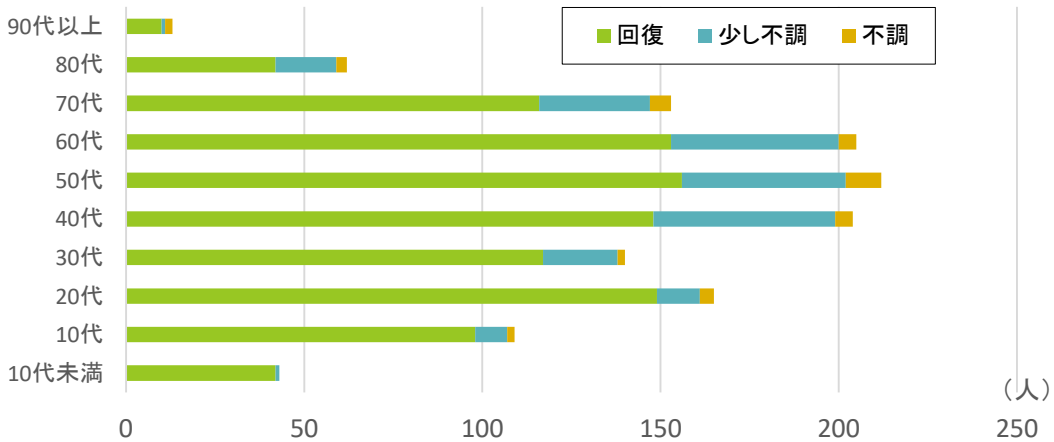
＊令和2年9月～令和3年5月までの退院者で無回答者を除く



退院後の回復状況（年齢別）
（＊令和２年９月～令和３年５月末までの退院者で無回答者を除く）

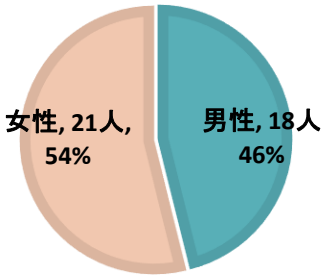
○ 年代別の回復状況を見ると、２０代以下では９０％以上、３０代は８４％、４０代から７０代、９０代以上では７０％以上が回復していると回答しているが、８０代では６８％とやや低くなっている。
○ 不調と回答した者の男女別では、女性の方が５４％とやや多くなっている。
○ 不調と回答した者の退院後の症状を見ると、倦怠感が最も多く、次いで集中力低下、呼吸困難感、食欲不振が多かった。

年代別退院者のからだの回復状況　（n=1,306）

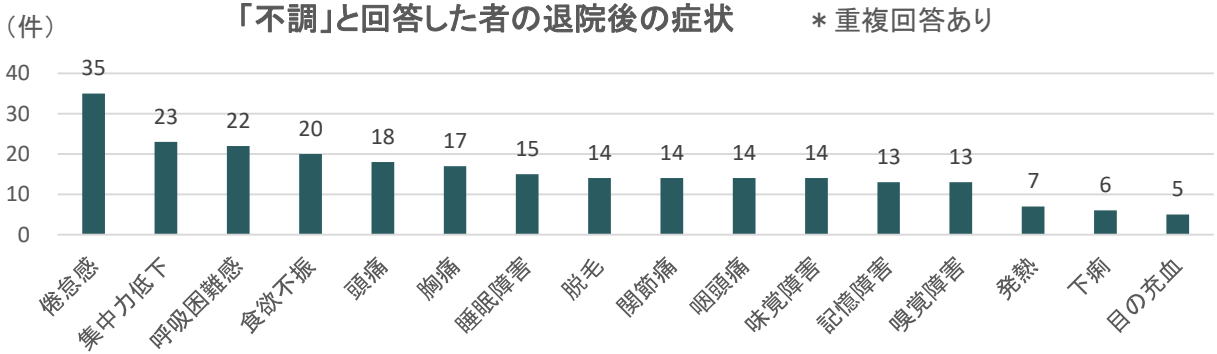


	回復	少し不調	不調	回復者割合
90代以上	10	1	2	77%
80代	42	17	3	68%
70代	116	31	6	76%
60代	153	47	5	75%
50代	156	46	10	74%
40代	148	51	5	73%
30代	117	21	2	84%
20代	149	12	4	90%
10代	98	9	2	90%
10代未満	42	1	0	98%
全体	1031	236	39	79%

「不調」と回答した者の男女別割合



「不調」と回答した者の退院後の症状　＊重複回答あり

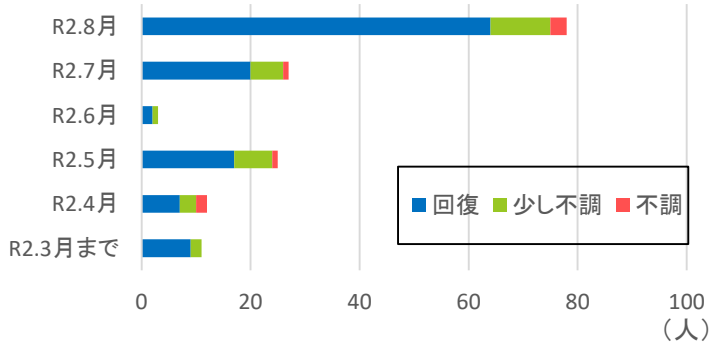


退院月別の回復状況

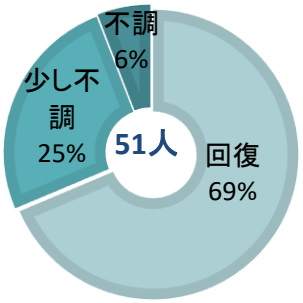
○　令和２年９月～令和３年５月までの退院者（無回答者を除く）１，３０６人の回復状況を月別で見ると、全体では、回復しているが１，０３１人（７９％）、少し不調２３６人（１８％）、不調３９人（３％）であった。
○　退院月別では、回復していると回答した回復者の割合が低いのは、R3年5月の退院者であった。
○　回復者割合を前回と比較すると、全体にも高く、３月までに退院し退院後１０週以上経過している回復者も前回の６９％と比べ、第２波～第４波では８３％と高くなっている。

前回

月別退院者のからだの回復状況　（n＝156）



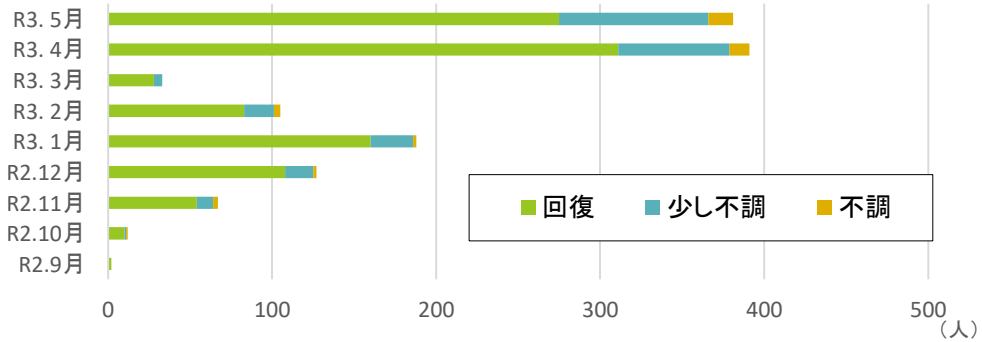
からだの回復状況
（退院後10週経過している者）



今回

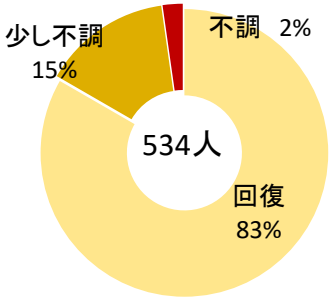
＊令和2年9月～令和3年5月までの退院者で無回答者を除く

月別退院者のからだの回復状況　（n=1,306）



退院月	回復	少し不調	不調	回復者割合
R3.　5月	275	91	15	72%
R3.　4月	311	68	12	80%
R3.　3月	28	5	0	85%
R3.　2月	83	18	4	79%
R3.　1月	160	26	2	85%
R2. 12月	108	17	2	85%
R2. 11月	54	10	3	81%
R2. 10月	10	1	1	83%
R2.　9月	2	0	0	100%

からだの回復状況
（退院後10週経過している者）

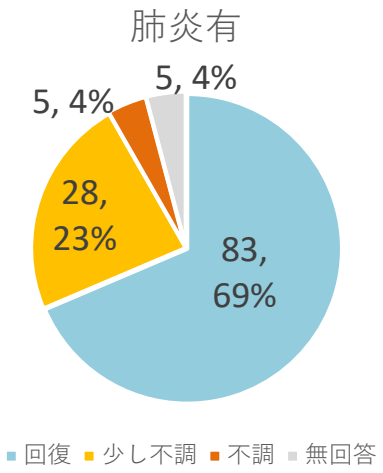


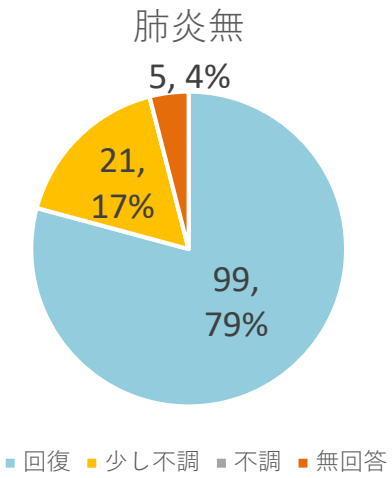
入院中の薬剤使用状況と退院後の体調 （令和3年5月以降の入院者）

○ 入院中に肺炎があった方が体調が回復していないと回答した者が多い傾向にあった。
○ また、肺炎があり中等症以上で使用されるデキサメタゾンを投与された者では回復していないと回答した者が多い傾向にあった。

1. 肺炎・体調

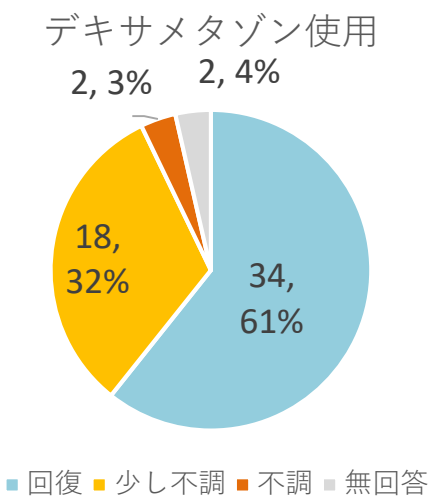
	有	無
回復	83	99
少し不調	28	21
不調	5	0
無回答	5	5

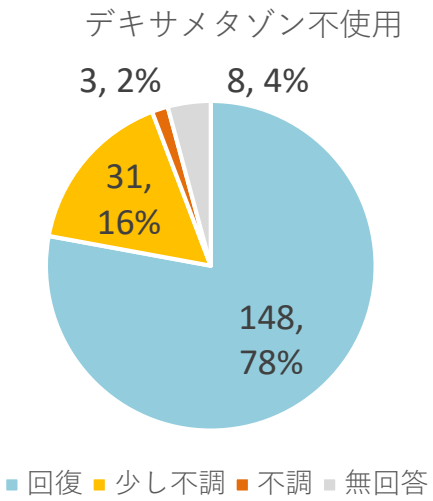




2. デキサメタゾン使用・体調

	有	無
回復	34	148
少し不調	18	31
不調	2	3
無回答	2	8



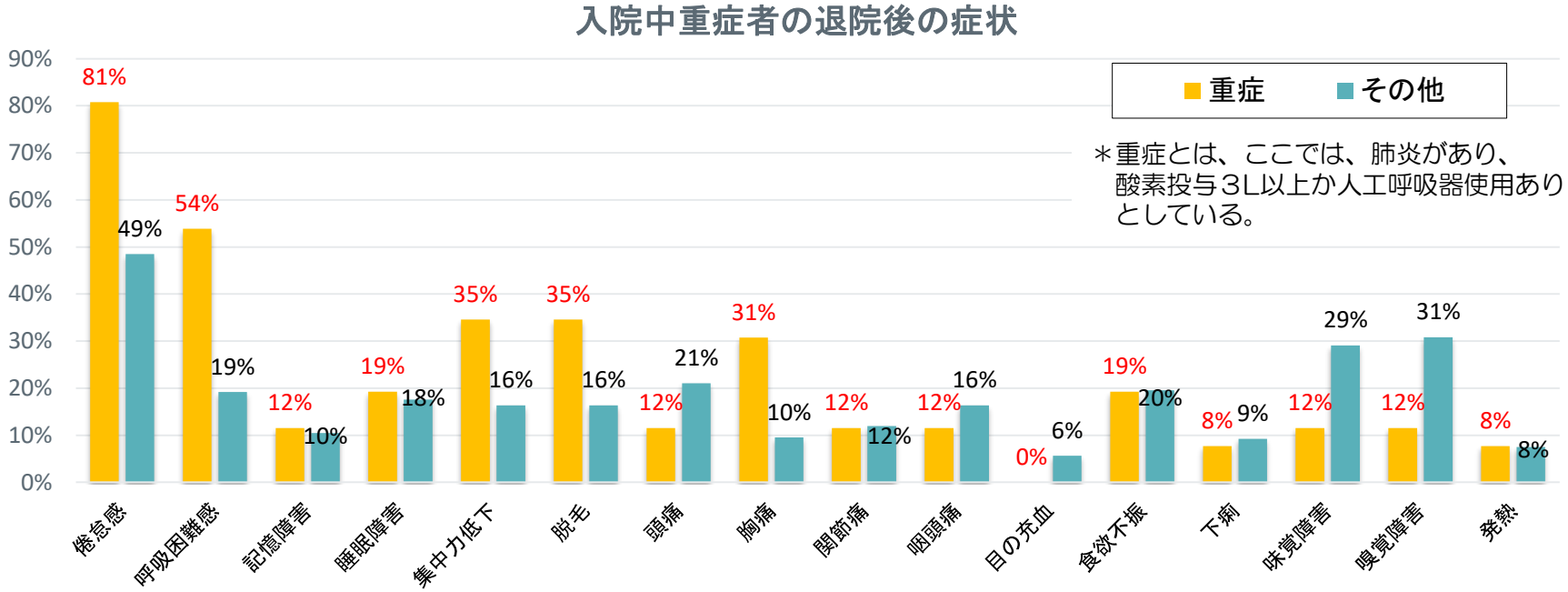


入院中の重症度別後遺症

○ 退院後何らかの症状がある７７２人のうち、入院中に肺炎があり、酸素投与３L以上もしくは人工呼吸器を使用した重症者２６人の退院後の症状では、倦怠感、呼吸困難感、集中力低下、脱毛、胸痛が重症者以外と比べ高くなっている。

○ 重症の有症状者のうち多かった症状は、倦怠感は８１％、呼吸困難感５４％と高く、重症者以外と比べると呼吸困難感と胸痛は約３倍、集中力低下、脱毛は２倍以上と高くなっている。

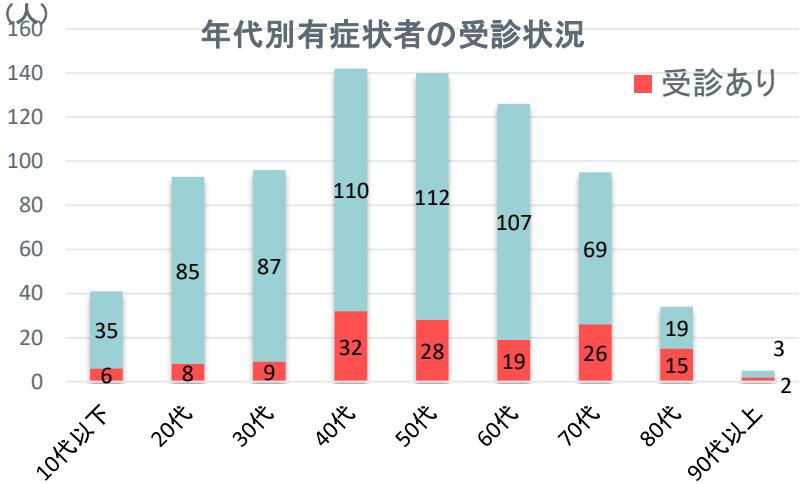
○ 頭痛、味覚障害、嗅覚障害については、重症者より重症者以外の方が約２倍高くなっている。

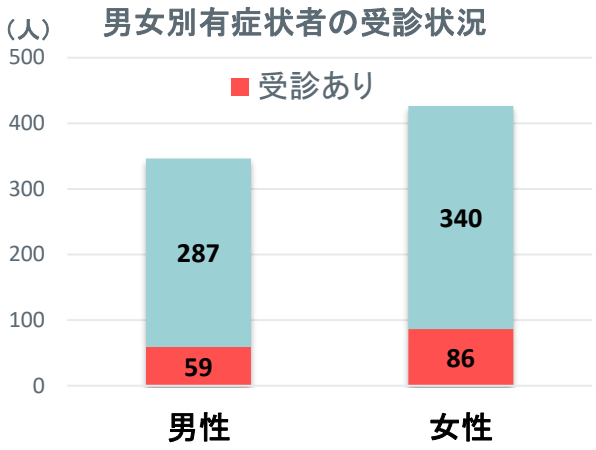


	倦怠感	呼吸困難感	記憶障害	睡眠障害	集中力低下	脱毛	頭痛	胸痛	関節痛	咽頭痛	目の充血	食欲不振	下痢	味覚障害	嗅覚障害	発熱	人数
重症	21	14	3	5	9	9	3	8	3	3	0	5	2	3	3	2	26
その他	362	143	78	131	122	122	157	71	89	122	42	146	69	217	230	56	746
計	383	157	81	136	131	131	160	79	92	125	42	151	71	220	233	58	772

退院後の有症状者の医療機関受診状況

- ○ 退院後の有症状者の医療機関への受診状況は、有症状者７７２人中１４５人で、約２割の人が受診している。
- ○ 年代別の受診率では、８０代が最も高く、次いで９０代以上、７０代と年齢が高い年代で高く、２０代、３０代では低くなっている。
- ○ 男女別の受診状況では、女性の方がやや受診率が高くなっている。
- ○ 受診医療機関としては、かかりつけ医５８％、入院医療機関２１％であり、その他が２１％で、受診先として、総合病院、近医など症状に応じた専門病院等であった。

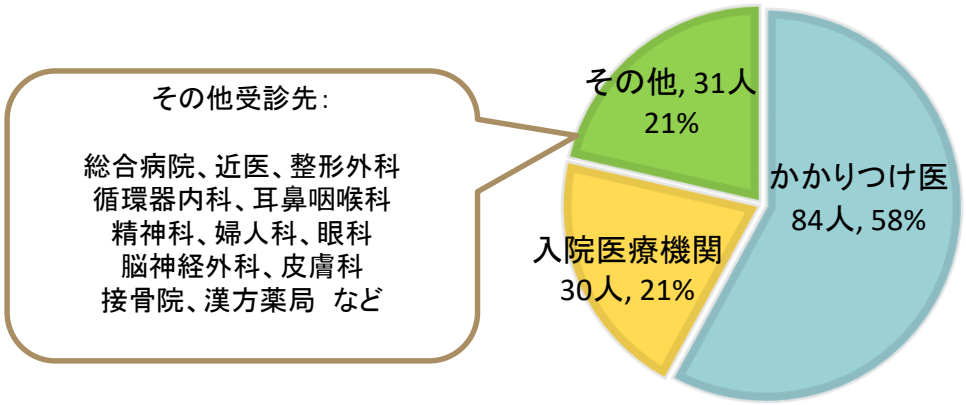




	有症状者数	受診者数	受診率
男性	346	59	17.1%
女性	426	86	20.2%
全体	772	145	18.8%

	有症状者数	受診者数	受診率
10代以下	41	6	14.6%
20代	93	8	8.6%
30代	96	9	9.4%
40代	142	32	22.5%
50代	140	28	20.0%
60代	126	19	15.1%
70代	95	26	27.4%
80代	34	15	44.1%
90代以上	5	2	40.0%
全体	772	145	18.8%

受診医療機関



その２．“後遺症” のまとめ

- ○ 有症状者の割合は、前回の調査４６％と比べ５5%と高くなっている。性別では女性の方が高かった。
- ○ 年代別では、４０代が有症状者の割合が最も高く、働き盛りの世代では６割以上で有症状があった。前回に比べると特に２０代の有症状者割合が３９％から５５％と高くなっていた。
- ○ 退院後症状がある者では、倦怠感が最も多く、約半数に見られ、次いで、嗅覚障害、味覚障害、頭痛、呼吸困難感が多かった。食欲不振も約２割に見られた。
- ○ 性別では、女性の方が男性より症状の出現が多かった。脱毛については、女性は男性の約２倍であった。
- ○ 年代別の症状では、２０代以下では、嗅覚障害が多く、次いで味覚障害、倦怠感であった。３０代～５０代は、倦怠感が最も多く、次いで嗅覚障害、味覚障害となっている。６０代も、倦怠感が最も多く、次いで、咽頭痛、呼吸困難感となっている。７０代も、倦怠感が最も多く、次いで、呼吸困難感、関節痛となっている。８０代以上では倦怠感が最も多いが、症状の出方が少ない。
- ○ 退院後何らかの症状が続いている者の内、１か月以上継続している者は半数であった。３か月以上継続している者は、１２５人（１6%）であり、症状としては、嗅覚障害が最も多く、次いで、脱毛、倦怠感が多くなっている。
- ○ 令和３年５月までの退院者（無回答を除く）１，３０６人のうち回復しているが１，０３１人（７９％）、少し不調２３６人（１８％）、不調３９人（３％)であった。
- ○ 回復している者は、若い年代では８０％以上と高かった。８０代が６８％とやや低かった。不調と回答した者の症状では、倦怠感が最も多く、次いで集中力低下、呼吸困難感、食欲不振が多かった。退院月別では、回復者の割合が低いのは、令和３年５月の退院者であった。
- ○ 退院後何らかの症状がある７７２人のうち、入院中に肺炎があり、酸素投与３L以上もしくは人工呼吸器を使用した重症者２６人の退院後の症状では、倦怠感、呼吸困難感、集中力低下、脱毛、胸痛が重症者以外と比べ高くなっている。一方、頭痛、味覚障害、嗅覚障害については、重症者以外の方が高くなっていた。
- ○ 退院後の有症状者の医療機関への受診は、有症状者７７２人中１４５人で、約２割であった。
- ○ 受診医療機関としては、かかりつけ医５８％、入院医療機関２１％であり、その他が２１％であった。

その14の総括

○ 退院後にも続く、いわゆる“後遺症” は、半数以上に見られ、その多くは、1か月以上持続し、3か月以上持続する症状もあることから新型コロナウイルス感染を予防することが重要である。

○ また、若い人でも後遺症が見られることから、感染予防の一層の啓発が必要である。
またワクチン接種が推奨される。

○ 特に、肺炎を併発し、酸素投与が3Ｌ以上必要な重症者では、倦怠感、呼吸困難感、集中力低下、脱毛、胸痛等が多くみられることから重症化予防が重要である。

○ 後遺症のある約2割が医療機関受診していることから、新型コロナウイルス感染症の後遺症について医療従事者はもちろんのこと、感染者の周囲の者も理解することが求められる。

○ 今後、相談体制については、予定している第五波の感染者の後遺症の調査結果も踏まえ保健所、入院医療機関を中心として、あり方を検討していく。

○ 本県は感染者の重症化や死亡率も低く抑えられており、今後も感染拡大防止のために保健所の疫学調査を効果的に行い、感染源の探求や接触者の検査をこれまでと同様に実施するとともに、早期受診、早期診断による早期発見、全例入院による早期隔離・早期治療、データの分析・活用を医療機関のご協力のもと継続的に行っていくことが重要と考える。